

長迫遺跡 A 地点

2013年

日田市教育委員会



長迫遺跡全景（画面上が南東）



長迫遺跡A地点 主要遺構部分（画面上が南東）

序 文

大分県日田市は、市街地の広がる小さな盆地を中心として、それを取り囲む山林が市域の82.9%を占める山間都市です。この地形的特性を生かした林業は「日田杉」というブランドを確立し、近代以降の日田の経済を支えてまいりました。しかし20世紀末に訪れたバブル崩壊により当市の林業も危機に瀕すこととなりました。そのような中で郷土の基幹産業を守るべく計画されたウッドコンビナート（日田高度総合木材加工団地）は、現在では日田の木材の一大集積地としての機能を担うとともに、敷地内的一角では、間伐材や建設廃材などの木屑を燃料とする国内最大級の木質バイオマス発電施設も稼動し、産業の発展と環境保全の両立を推進しております。

本書はこのウッドコンビナート建設事業に伴いまして発掘調査を実施した有田塚ヶ原遺跡群のひとつ、長迫遺跡（A・B地点）のうちA地点についての調査内容をまとめたものです。この調査では、古墳時代から奈良・平安時代に谷の傾斜地を切り開いて営まれた集落が見つかっています。

貴重な遺跡の調査内容をまとめました本書が、文化財の保護や地域の歴史などの普及啓発に、また学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました地権者および関係者の方々、そして寒暖なく作業に従事いただきました地元の皆様方に対して、心から厚くお礼を申し上げます。

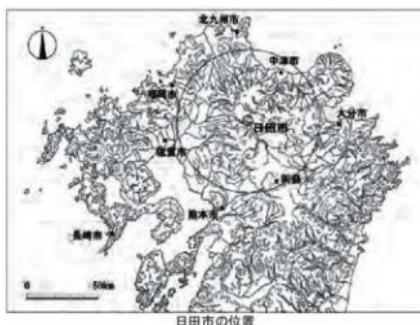
平成25年3月

日田市教育委員会

教育長 合原 多賀雄

例　　言

1. 本書は、市林政課（現、林業振興課）が計画・実施したウッドコンビナート建設推進事業に先立ち、平成6年度～9年度に市教育委員会が実施した有田塙ヶ原遺跡群発掘調査のうち、平成8～9年度に実施した長迫遺跡（A・B地点）のA地点の内容をまとめた発掘調査報告書であり、ウッドコンビナート建設推進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の8冊目にあたる。B地点の内容および長迫遺跡（A・B地点）のまとめについては、別途報告予定である。
2. 調査にあたっては、市林政課（当時）、地権者、工事関係者、大分県教育委員会および地元の方々にご協力をいただいた。
3. 本書に掲載した遺構実測は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託したほか調査担当者が行い、製図は雅企画有限会社に委託したものや江藤・武石の協力を得たものほか調査担当者が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測および製図は、雅企画有限会社に委託したほか、調査担当者が行った。
5. 空中写真撮影は株式会社スカイサーベイに委託し、その成果品を使用した。
6. 遺物の写真撮影は有限会社雅企画および株式会社九州文化財総合研究所に委託し、その成果品を使用したもののほか、若杉が行った。
7. 插図中の方位はすべて磁北であり、文中の方位角も磁北で示している。
8. 出土遺物および図面・写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
9. 本書の執筆・編集は行時桂子が行った。



本文目次

Iはじめに	1
(1)調査に至る経過	1
(2)長迫遺跡の調査	3
(3)調査組織	4
II遺跡の立地と環境	5
III調査の内容	10
(1)調査の概要	10
(2)遺構と遺物	10
1)堅穴建物跡	10
2)掘立柱建物跡	39
3)井戸	45
4)土坑	45
5)溝	48
6)その他の遺物	52
(3)小結	52

挿図目次

第1図 ウッドコンビナート計画位置図(1/15,000)	1	第13図 10号堅穴建物跡、カマド、出土遺物実測図	
第2図 ウッドコンビナート計画地(1期工事)遺跡位置図 (1/10,000)	2	第14図 11~13号堅穴建物跡、カマド、出土遺物実測図	19
第3図 周辺遺跡分布図(1/20,000)	6	第15図 14・15号堅穴建物跡、出土遺物実測図	20
第4図 A・B地点全体図(1/800)	7~8	第16図 16・17号堅穴建物跡、出土遺物実測図	
第5図 A地点遺構配置図(1/400)	9	第17図 18・19号堅穴建物跡、カマド、出土遺物実測図	21
第6図 1・2号堅穴建物跡、カマド、出土遺物実測図 (1/80, 1/40, 1/4)	11	第18図 20・21号堅穴建物跡、出土遺物実測図	23
第7図 3・4号堅穴建物跡、カマド、出土遺物実測図 (1/80, 1/40, 1/4)	13	第19図 22~23号堅穴建物跡、出土遺物実測図	24
第8図 5号堅穴建物跡実測図(1/80)	14	第20図 24・25号堅穴建物跡、出土遺物実測図	
第9図 5号堅穴建物跡出土遺物実測図(1/4)	15	第21図 26・27号堅穴建物跡、出土遺物実測図	25
第10図 6号堅穴建物跡、カマド、出土遺物実測図 (1/80, 1/40, 1/4)	16	第22図 (1/80, 1/4)	27
第11図 7・8号堅穴建物跡、カマド、出土遺物実測図 (1/80, 1/40, 1/4)	17	第23図 (1/80, 1/4)	28
第12図 9号堅穴建物跡、カマド、出土遺物実測図 (1/80, 1/40, 1/4)	18	第24図 (1/80, 1/4)	30

第22図 28・29号堅穴建物跡、カマド、出土遺物実測図 (1/80、1/40、1/4)	31	第29図 1~3号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	42
第23図 30~33号堅穴建物跡、出土遺物実測図 (1/80、1/4)	33	第30図 4・5号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	43
第24図 34~37号堅穴建物跡、出土遺物実測図 (1/80、1/4)	35	第31図 6・7号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	44
第25図 38号堅穴建物跡、出土遺物実測図 (1/80、1/4)	36	第32図 1・2号井戸実測図 (1/80)	45
第26図 39~41号堅穴建物跡、出土遺物実測図 (1/80、1/4)	37	第33図 土坑実測図① (1/40)	49
第27図 42・43号堅穴建物跡、出土遺物実測図 (1/80、1/4)	39	第34図 土坑実測図② (1/80)	50
第28図 44~47号堅穴建物跡、出土遺物実測図 (1/80、1/4)	40	第35図 土坑実測図③ (1/80)	51
		第36図 土坑出土遺物実測図 (1/4)	52
		第37図 鉄製品・鉄生産関連遺物・石製品・石器実測図 (1/2、1/3)	53
		第38図 石器実測図 (1/2、1/3)	54

表 目 次

第1表 ウッドコンビナート建設に伴う有田塚ヶ原遺跡群の調査および関連文献表	2
第2表 土器観察表①	55
第3表 土器観察表②	56
第4表 鉄製品・鉄生産関連遺物観察表	57
第5表 石器・石製品観察表	57

写 真 目 次

巻頭写真図版 長迫遺跡全景 (画面上が南東)	写真図版 8 24~27号堅穴建物跡、2号掘立柱建物跡、 5~17号土坑
長迫遺跡A地点 主要遺構部分 (画面上が南東)	写真図版 9 27~38号堅穴建物跡、5~17号土坑
写真図版 1 長迫遺跡全景 (南から)	写真図版 10 32~38号堅穴建物跡
写真図版 2 1~4号堅穴建物跡、8号土坑	写真図版 11 38~43・45~47号堅穴建物跡、 1~3号掘立柱建物跡
写真図版 3 5~8号堅穴建物跡	写真図版 12 4~5号掘立柱建物跡、 1~2・5~7・10~11・17号土坑
写真図版 4 9~13号堅穴建物跡	写真図版 13~18 出土遺物
写真図版 5 14~17号堅穴建物跡、19号土坑	
写真図版 6 17~21号堅穴建物跡	
写真図版 7 20~24号堅穴建物跡、3号掘立柱建物跡、 15号土坑	

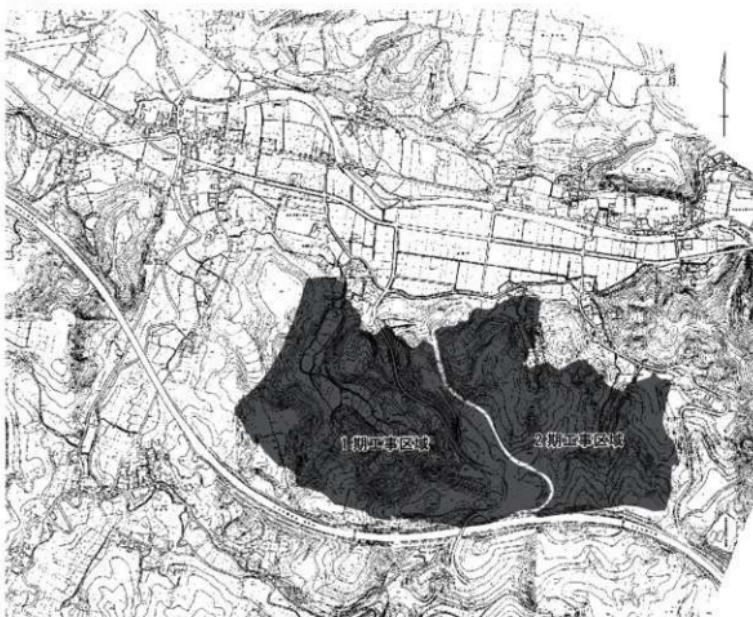
I はじめに

(1) 調査に至る経過

長迫遺跡はウッドコンビナート（日田高度総合木材加工団地）建設地内で確認された遺跡である。ウッドコンビナート事業は、日田市の基幹産業である林業の長期不況等の諸問題を打開し、また大分県が県西部の林業・木材産業の活性化を目指し策定したグリーンポリス構想に基づき、木材供給基地として日田市に計画されたもので、平成5年度には日田市役所内にウッドコンビナート推進室が設置され、平成7年度から平成10年度までの4年間を第1期とする、開発面積677,315m²もの広大な面積の建設工事が進められることとなった。

この工事着手に先立ち、平成6年度より予定地内の分布調査および試掘調査を実施し、7ヶ所で遺跡の存在が確認されたことから、これらの取扱いについて事業主体であるウッドコンビナート推進室と協議を行い、その結果これらは有田塚ヶ原遺跡群として、用地買収や樹木の伐採が終了した場所から随時発掘調査を行うこととなった。平成7年2月の平島横穴墓群の調査開始に始まり、石ヶ迫遺跡A・B地区、クビリ遺跡、有田塚ヶ原遺跡、祇園原遺跡、尾漕2号墳、長迫遺跡の順に進め、平成9年7月には尾漕2号墳と長迫遺跡の調査終了をもって現地でのすべての作業を完了した。整理作業は平成7年度から現在まで断続的に行い、平成15年度から調査報告書を順次発行している。

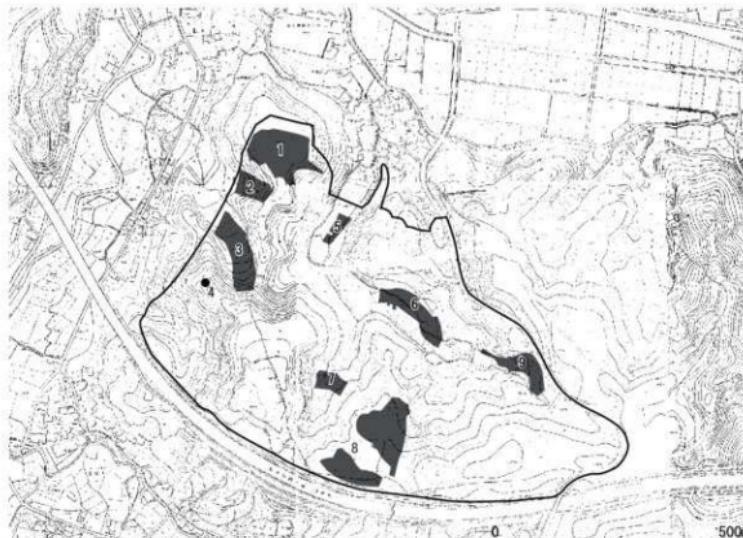
なお、有田塚ヶ原遺跡群として調査を行った遺跡とその関連文献については次頁の表のとおりである。



第1図 ウッドコンビナート計画位置図 (1/15,000)

第1表 ウッドコンビナート建設に伴う有田塚ヶ原遺跡群の調査および関連文献表

調査年度	遺跡名	関連文献名	報告書
平成6～7年度	平島横穴墓群	行時志郎他/「5 平島横穴墓群」『平成6年度(1994年度)日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1996年 行時志郎他/「2 平島横穴墓群(HSY)」『平成7年度(1995年度)日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1997年	未報告
平成7年度	石ヶ迫遺跡A・B地区	行時桂子/『石ヶ迫遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第49集/日田市教育委員会/2004年	報告済
平成7年度	クビリ遺跡	行時桂子/『クビリ遺跡・有田塚ヶ原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第58集/日田市教育委員会/2005年	報告済
平成7年度	有田塚ヶ原遺跡	行時桂子/『クビリ遺跡・有田塚ヶ原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第58集/日田市教育委員会/2005年	報告済
平成7～8年度	祇園原遺跡	行時桂子/『祇園原遺跡Ⅱ(弥生・古墳時代遺構編)』日田市埋蔵文化財調査報告書第81集/日田市教育委員会/2007年 行時桂子/『祇園原遺跡Ⅲ(弥生・古墳時代遺物編)』日田市埋蔵文化財調査報告書第87集/日田市教育委員会/2008年 行時桂子/『祇園原遺跡Ⅱ(近世墓編Ⅰ)』日田市埋蔵文化財調査報告書第96集/日田市教育委員会/2010年 渡邊隆行他/『祇園原遺跡Ⅱ(近世墓編Ⅱ)』日田市埋蔵文化財調査報告書第101集/日田市教育委員会/2011年	報告済
平成8～9年度	尾瀬2号墳	行時桂子/『尾瀬2号墳』日田市埋蔵文化財調査報告書第69集/日田市教育委員会/2005年	報告済
平成8～9年度	長迫遺跡A・B地点	行時志郎/「7 長迫遺跡(NSK)」『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1998年 行時志郎他/「2 長迫遺跡A・B地点(NSK-A・B)」『平成9年度(1997年度)日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1999年	本報告(A地点)
-	有田塚ヶ原遺跡群全般	『有田塚ヶ原遺跡群』(概要報告)/日田市教育委員会/1999年	-



1. 祇園原遺跡 2. 長迫遺跡B地点 3. 長迫遺跡A地点 4. 尾瀬2号墳 5. 石ヶ迫遺跡A地区
6. 石ヶ迫遺跡B地区 7. クビリ遺跡 8. 有田塚ヶ原遺跡 9. 平島横穴墓群

第2図 ウッドコンビナート計画地(1期工事)遺跡位置図(1/10,000)

(2) 長迫遺跡の調査

長迫遺跡は、求来里川沿いに広がる沖積地から、東部丘陵に向かって入り込む二股に分岐した谷一帯に立地する。調査前のこの一帯は杉林で覆われていたが、それ以前は畠として利用されていたようであり、斜面と谷の間には排水用の側溝が設けられていた。

遺跡は調査地点が二つの谷に分かれることから、便宜上南側の谷をA地点、北側の谷をB地点とした。A地点の調査範囲は、谷の最も広いところで幅約45m、谷の出口に近い調査区西端から谷の奥までが約150mを測る。遺構検出面における標高は122～134mで、谷奥から谷の西側に向かって緩やかに傾斜し、調査区の中央付近で緩やかにカーブしている。一方B地点の谷は谷の出口付近の最大幅は約45m、調査区西端から谷奥までの距離は約80mを測る。谷の長さはA地点に比べて短いが、谷奥の最高所と調査区西端の出口付近での標高差はA地点とほとんど変わらず、勾配はA地点に比べて急傾斜である。

表土除去作業はA地点の奥から進めていき、A地点が終わり次第B地点の表土除去作業に移行した。調査区西側の調査区外は民有地・市道用地であったため、表土は調査の終了した祇園原遺跡があった丘陵まで大型のキャリーで運搬せざるを得なかった。両地点とも谷奥側の表土は浅かったものの下るにつれて深くなり、調査区西端では遺構検出面まで深さ1m以上となった。遺構検出面の地山は全体的に暗褐色の粘質土を呈していたが、谷奥では凝灰岩の岩盤に近い茶灰色を呈し、遺構も確認されないことから、近年の植林により削平を受けていたことがわかった。バックホウによる表土除去後は手作業で遺構検出作業を進めていった。この間に基準点を設置し、遺構が確認できた段階で遺跡全体の写真撮影と全体図作成を行い、各遺構の掘り下げを進めていった。掘り下げ作業はA地点より行い、個別遺構の実測・写真撮影を並行しながらB地点の調査に移っていましたが、工事の都合上尾瀬2号墳の調査も同時にを行うことになったため、実測作業を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

5～6月は大雨で幾度も調査区が水没し、その間排水作業等にも手をとられて時間を要したが、6月21日には尾瀬2号墳と合わせて現地説明会を開催し、7月24日には現地でのすべての作業が完了して調査を終えた。調査の主な流れは以下のとおりである。

平成8年度／12月16日～平成9年1月24日 重機による表土除去（A・B地点）

12月24日～25日 県教委職員による調査協力

平成9年1月31日 A地点遺構検出開始

2月14日～24日 長迫遺跡A・B地点、尾瀬2号墳の基準点設置

2月20日 B地点遺構検出開始

2月21日～3月28日 遺構実測委託

3月11日～28日 この間に調査の進捗に合わせて県教委職員による調査協力

平成9年度／5月31日 佐々木章氏（大分短期大学教授）プラント・オバール試料採集

6月16日 小田富士雄氏（福岡大学教授）来訪

6月21日 尾瀬2号墳・長迫遺跡現地説明会開催

6月30日 渋谷忠章氏（大分県文化課主幹）来訪

7月4日 空中写真撮影

7月9日～7月22日 遺構実測委託

7月24日 機材撤収、現地での調査終了

※上記のほか、平成10年度には出土した鉄滓の分析を九州テクノリサーチ TACセンターに委託した。

(3) 調査組織

発掘調査から報告書作成までの関係者は以下のとおりである（職名は当時のまま）。

平成8・9年度／発掘調査・整理作業（整理作業は平成8～23年度の間断続的に実施）

調査主体　日田市教育委員会　／　調査責任者　加藤正俊（日田市教育委員会教育長）

調査協力　江田豊・吉田博嗣（大分県教育委員会文化課）

調査事務　原田俊隆（日田市教育委員会文化課長）、長尾幸夫（同課長補佐兼文化財係長）

森山一宏（同主任）、衛藤和美（H8のみ）・竹原里香（同臨時職員）

調査担当　行時志郎（同主任）、松下桂子（同主事）、森山敬一郎（同嘱託）

調査員　土居和幸（同主任）、吉田博嗣（同主事/H9）、永田裕久（同主事補）

発掘作業員　梶本 進、梶本文雄、秋ヤエ子、秋吉ミユキ、安達義男、穴見基彦、池田智之

諫山豊吉、諫山三代子、石井貞美、石井ツヤ子、石田スズ子、伊藤キヨ子、伊藤 圭
井上雄一、猪熊スミ子、猪熊忠孝、猪熊 誠、猪熊ヨネ、宇野里紗、梅見雅之

江藤勝義、江藤キミ子、荏隈香苗、荏隈キミエ、荏隈典子、荏隈マサ子、荏隈政子

大内史絵、大口友里子、小田友和、小野多美子、鍛治谷アサヨ、鍛治谷節子、梶原聖子
梶原シゲ子、梶原利徳、梶原朋子、梶原寛介、鎌倉 章、河津雅寛、北澤幾子

木下富三郎、熊谷雄介、黒木智典、牛王克彦、五島勇美子、五反田静子、後藤 圭
後藤祐司、財津勲子、財津静子、財津真弓、財津利枝、財津由太、酒井光敏、坂本智子

坂本則子、佐竹俊介、佐藤カスミ、島田隆幸、清水孝明、清水忠造、下限久司

庄内武子、菅田クマエ、菅田三郎、菅田初夫、菅田ミヤ子、園田光子、園田義雄

高倉厚巳、高倉ハナ子、高倉秀雄、高倉富美子、高倉美津子、高倉美利、高瀬一邦
武内アイ子、田中 昇、津江久徳、手嶋七郎、出野 梢、豊田愛子、中島カズ子

中島トミエ、中野哲朗、中野ヨシ子、野内太一郎、長谷部喜吉、林 健二、樋口恭子
樋口達人、樋口タニ子、藤原亜衣、堀尾保志、前 善知、松岡初次、松岡弘子

松竹智之、松本トキエ、三侯教史、宮崎正勝、毛利泰雄、森山拓也、森山奈美江

矢幡芳樹、横尾久美子、吉長澄江、吉長ハルエ、渡邊芳五郎

整理作業員　穴井こずえ、穴井トヨ子、石田紀代子、石松裕美、伊藤一美、井上とし子、宇野富子

宇野理紗、荏隈香苗、大口友里子、小埜和美、鍛治谷節子、梶原聖子、梶原ヒトエ

川原君子、河原直美、黒木千鶴子、桑野菊美、財津真弓、酒井貴代美、坂口豊子

坂本和代、坂本智子、坂本則子、相良由香、佐藤みちこ、佐藤美和、渡谷美智子

武石和美、田中静香、田中真央、出野 梢、豊田愛子、中川照美、中原琴枝、樋口恭子

聖川暢子、平川優子、藤原亜衣、松岡弘子、三浦陽子、溝口さや香、森山奈美江

安元百合、横尾久美子、吉田千津子、和田ケイ子

平成24年度／報告書作成

調査主体　日田市教育委員会　／　調査責任者　合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）

調査事務　財津俊一（日田市教育庁文化財保護課長）、土居和幸（同埋蔵文化財係長）

草藤善紹（同副主幹）、井上和泉（同主查）

報告書担当　行時桂子（同主査）

報告書作成協力　江藤由季（日田市教育庁文化財保護課臨時職員）、武石和美（同整理作業員）

II 遺跡の立地と環境

大分県西部、筑後川上流域に位置する日田市は、標高80m前後の沖積地に広がる市街地の周囲を標高約150mの阿蘇溶岩台地が巡り、その外周に標高200～600mの耶馬溪溶岩台地が、市の境界域には700～1,000m級の山々が連なって盆地の景観を形成する。この山々を源とする大小の河川は溶岩台地の合間に縫って沖積地へ流れ込み、南流する花月川や西流する玖珠川などが合流して筑後川となり有明海へ注ぐ。

長迫遺跡のある有田塚ヶ原遺跡群は盆地東部の大字有田・東有田に属し、花月川支流の有田川と求来里川が合流する東側に立地する。有田地域はいわゆる「盆地」内とは文化圏を異にし、近世期日田盆地が江戸幕府の直轄地であった頃には東隣の森藩（玖珠）領となっていた地域である。有田塚ヶ原遺跡群の各遺跡は阿蘇溶岩台地を中心に立地し、全体的には急な斜面部が多く見られる。このような遺跡の立地条件は盆地周辺部では一般的であり、台地上には弥生時代などの古い集落や古墳が造られ、時代が下がるにつれて谷部や小冲積地などに集落が広がっていく傾向がある。長迫遺跡はこのような地勢の谷部斜面に営まれている。

この有田塚ヶ原遺跡群では本報告のほかに、鉄器や装身具類など多数の副葬品が出土した大規模な墓地である平島横穴墓群（29）、縄文時代早期の集石と古墳時代～古代の集落跡が見つかった石ヶ迫遺跡A・B地区（27・28）、古代の鍛冶に関する遺構・遺物が出土したクビリ遺跡（31）、縄文時代の落し穴と古代の建物群が見つかった有田塚ヶ原遺跡（32）、弥生～古墳時代の集落跡と50基を超える近世墓群からなる祇園原遺跡（25）、凝灰岩の箱式石棺を主体部とする古墳時代中期の円墳である尾瀬2号墳（30）が調査されている。

有田塚ヶ原遺跡群のある有田地区や、求来里川流域で南に隣接する求来里地区では、近年大規模な圃場整備などに起因する発掘調査が数多く実施されており、そのなかから長迫遺跡の主な時代となる古墳時代～古代の遺跡に的をしぼってみる。長迫遺跡のある丘陵の北側続には、古墳時代後期の横穴式石室を主体とする塔ノ本2・3号墳や同1号墳が存在していた（22/現在は消滅または一部消滅）。これらの古墳群の北側の丘陵裾部には、市指定史跡の円墳である平島古墳（23）や、弥生時代後期の環濠集落のほかに古墳時代後期の集落が確認された平島遺跡（21・24）がある。長迫遺跡から求来里川の谷に下った沖積地にある尾瀬遺跡（33）では、弥生～古墳時代の集落が見つかっている。対岸の丘陵には古墳時代の石棺墓や石蓋土坑墓などで構成された墓地群である大迫遺跡（19）や、3基の円墳からなる中尾古墳群（18）がある。長迫遺跡から求来里川を南に約900m上了位置には、平安時代の堅穴遺構が確認された森ノ元遺跡（36）が、さらにもう少し遡った有田地区と求来里地区の境界付近の丘陵には、古墳時代の集落や古代の土坑墓が見つかった馬形遺跡（37）、その東側対岸の丘陵には、横穴式石室を主体とする3基の円墳からなるガニタ古墳群（38）がある。ここからさらに求来里川を遡った求来里地区も古墳時代の遺跡が多く確認されており、金田遺跡（40）・町ノ坪遺跡（42）・求来里平島遺跡（45）・名里遺跡（46）では、古墳時代の中でも時期が下がるにつれて求来里川の上流すなわち谷の奥に向かって集落域が拡大する様子が明らかとなっている。特に金田・町ノ坪の両遺跡の古墳時代中期の集落では朝倉産の初期須恵器や朝鮮半島系土器が出土しており、地床炉からカマド導入期の集落変遷を追うことができる。このほかにも、求来里川右岸の丘陵には円墳の亀ノ甲古墳（43）、左岸の台地上には古墳時代後期の石蓋土坑墓が見つかった元宮遺跡（41）などが立地しており、求来里川流域は古墳時代の遺跡の密集地ともいえる。



- | | | | | | |
|-----------|-----------|-------------|--------------|-----------------------------|------------|
| 1 恵眼山遺跡 | 9 夕田横穴墓群 | 17 宮ノ下遺跡群 | 25 紙園原遺跡 | 33 尾浦遺跡 | 40 金田遺跡 |
| 2 丸山古墳※ | 10 夕田古墳 | 18 中尾古墳群※ | 26 長迫遺跡A・B地点 | 34 尾浦1号墳 | 41 元宮遺跡 |
| 3 寺道遺跡 | 11 佐寺横穴墓群 | 19 大迫遺跡 | 27 石ヶ道遺跡A地区 | 35 有田塚ヶ原古墳群 | 42 町ノ坪遺跡 |
| 4 大波瀬遺跡 | 12 佐寺遺跡 | 20 中尾原遺跡 | 28 石ヶ道遺跡B地区 | 36 森ノ元遺跡 | 43 亀ノ甲古墳臺 |
| 5 菓師堂山古墳 | 13 内ノ下遺跡 | 21 平島遺跡E地点 | 29 平島横穴墓群 | 37 馬形遺跡 | 44 町野原遺跡臺 |
| 6 丸尾神社古墳 | 14 川原田遺跡 | 22 塔ノ本1号墳 | 30 尾浦2号墳 | 38 ガニタ古墳群※ | 45 求来里平島遺跡 |
| 7 北向古墳臺 | 15 佐寺原遺跡 | 23 平島古墳臺 | 31 クビリ遺跡 | 39 小西遺跡 | 46 名里遺跡 |
| 8 法恩寺山古墳群 | 16 堂園遺跡 | 24 平島遺跡A～C区 | 32 有田塚ヶ原遺跡 | ※は既知遺跡であるが、これまでに発掘調査例がないもの。 | |

第3図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)

〔参考文献〕

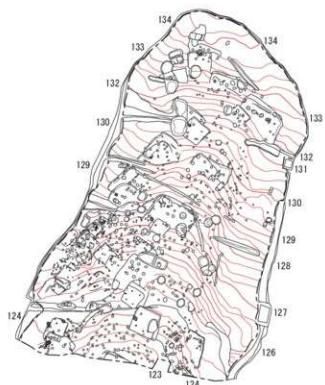
千田 翼「日田・玖珠地域の地形ーとくに台地地形についてー」『日田・玖珠地域ー自然・社会・教育ー』 大分大学教育学部 1992
行時志郎編『有田塚ヶ原遺跡群』 日田市教育委員会 1999

『平成4年度(1992)～23年度(2011)日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会 1994～2012

『日田市史』 日田市 1990／各遺跡の発掘調査報告書 ほか

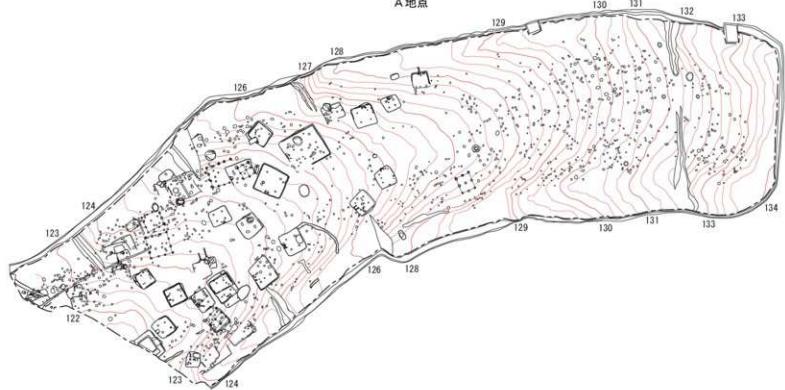
Y=2800

B地点



Y=2900

A地点



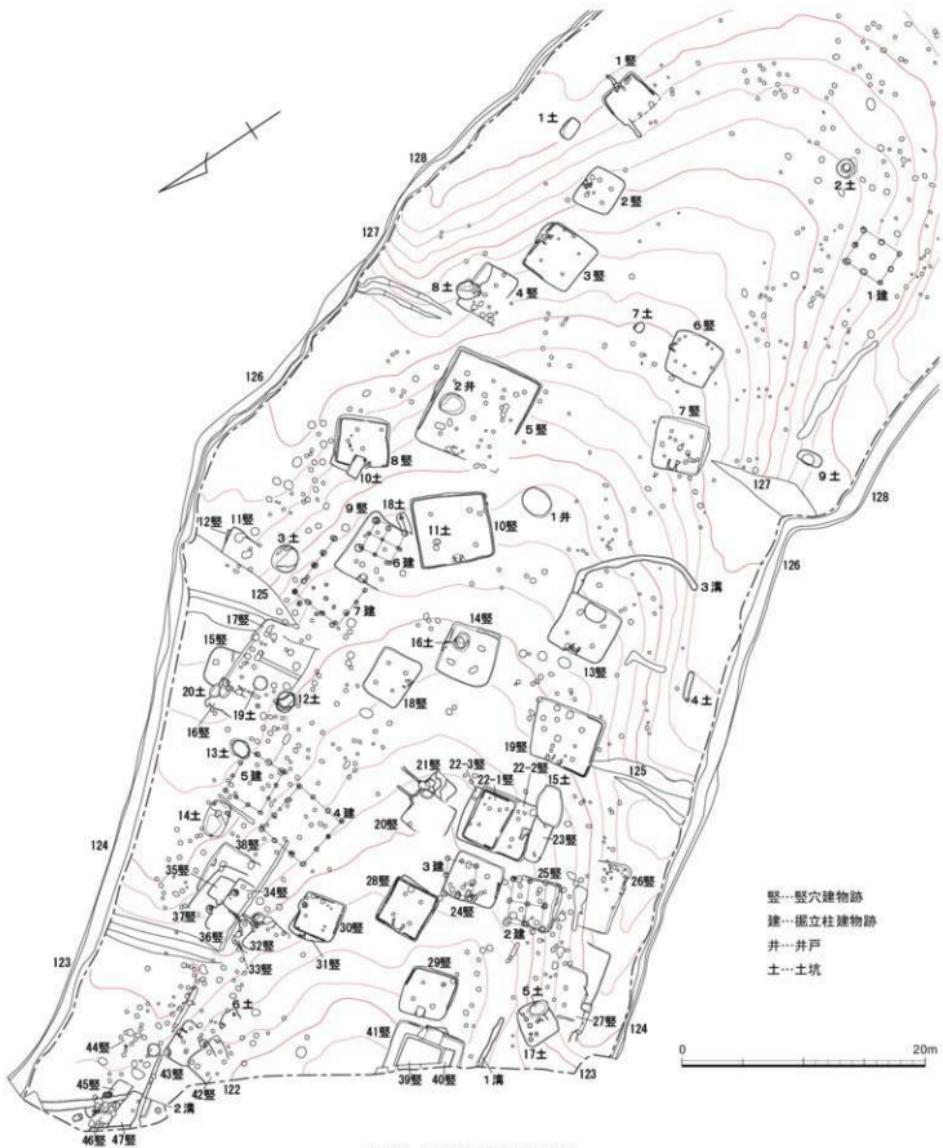
0 20 40m

X=36800

X=35900

X=35800

第4図 A・B地点全体図 (1/800)



第5図 A地点造構配置図(1/400)

III. 調査の内容

(1) 調査の概要（第4・5図）

A地点の調査区は二股に分岐した谷のうち南側の谷で、南東に向かって奥深くのびる。調査区の南に接する丘陵端部には、発掘調査により箱式石棺と土坑墓を主体部とする5世紀初頭～前半代の円墳と判明した尾瀬2号墳が存在する。今回の調査区は南北方向に長さ約150m、東西方向に幅約45mのゆるやかに西に曲がる形状を呈し、調査面積は6,650m²である。調査区の最も高い場所で標高約134m、最も低い場所で約122m、比高約12mを測り、比較的斜度のきつい斜面に立地しているといえる。そのため、標高の低い部分を半分程度欠く遺構が多く見られる。

試掘調査段階では遺構検出面が大きく2層存在するとと思われたため、最初に谷を横断するトレーンチを入れて堆積状況を観察したところ、地表面から深さ約1mの古代の遺物包含層（暗茶褐色土）が認められ、この面から下層は黒色土ではあるけれども遺物が確認されない自然堆積層であることがわかったので、遺構検出作業はこの面で行うこととした。また黒色土の下には茶褐色の土層が存在していたが、黒色土の上面で遺構が確認されない箇所については、黒色土を除去して茶褐色土の面まで遺構検出作業を行った。

検出された遺構は、竪穴建物跡47軒、掘立柱建物跡7棟、井戸2基、土坑20基、溝3条とピット多数である。遺構は調査区中央より北側（斜面の低い方）に集中しており、南側の高い部分では小さなピットは多数見られるもののその他の遺構は全く存在していなかった。

以下、各遺構について述べる。なお遺構番号については、調査の進捗に従い割り振った番号をそのまま用いている。また各遺物の詳細については、巻末の遺物観察表にまとめている。

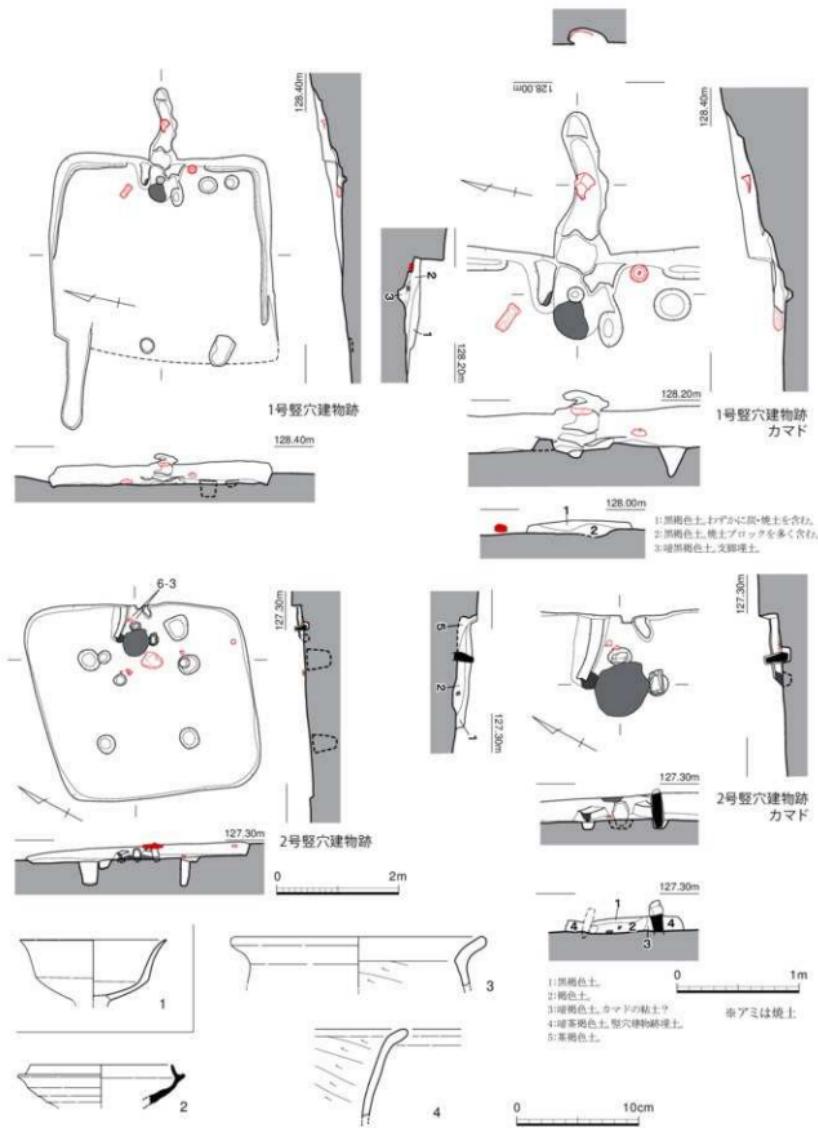
(2) 遺構と遺物

1) 竪穴建物跡

竪穴建物跡は計47軒検出された。平面方形または長方形を基本としており、カマドを有するものが多く見られる。調査区内においては先述のとおり斜面の低い方にあたる北半に集中しており、そのなかでも高いところには単独で存在するものが多いものの、低いところでは最大で7軒が切り合うなど密集している。

1号竪穴建物跡（第6図、写真図版2）

調査区中央部東寄りで検出された平面方形プランを呈すると思われる遺構である。東西軸約3.1m+a、南北軸約3.3m、床面までの深さは最大で約32cmを測る。西半は削平されているが、北壁沿いに浅い溝が見られ、3方に巡る壁際溝の続きの可能性がある。主柱穴は検出できなかった。東壁中央にカマドと煙道が布設されており、カマドの袖は左側のみ約38cm残存していたが、右側には袖石抜取痕と考えられるピットが検出された。またカマド内部では支脚痕と見られるピットも確認された。左袖そばで直方体を呈する石が検出されており、支脚または袖石であった可能性がある。煙道は長さ約1mを測り、煙道内に土器（甕）が残っていた。この遺構からは、土師器高杯（第6図1）が出土している。



第6図 1・2号窓穴建物跡、カマド。出土遺物実測図 (1/80, 1/40, 1/4)

2号竪穴建物跡（第6図、写真図版2）

調査区中央部東寄り、1号竪穴建物跡の北で検出された平面不整方形を呈する遺構である。南北軸約3.5m、東西軸約3.0m、床面までの深さは最大で約20cmを測る。主柱穴は4本で、深さは約38～48cmを測る。東壁中央にカマドが布設されており、左袖の現存長約50cm、右袖の現存長約20cmである。袖石は右袖にのみ残存しており、左袖には袖石抜取痕が見られ、これらの幅は約42cmを測る。カマド内部では支脚の石が残っていた。この遺構からは、須恵器壺、土師器甕・瓶（第6図2～4）が出土している。

3号竪穴建物跡（第7図、写真図版2）

調査区中央部東寄り、2号竪穴建物跡の北で検出された平面正方形を呈する遺構である。南北軸約4.5m、東西軸約4.3m、床面までの深さは最大で約35cmを測る。主柱穴は4本で、深さは約18～35cmを測る。遺構の東半には壁際溝が巡る。東壁のやや南寄りにカマドが布設されており、左右ともに袖の現存長約45cmで、袖幅は48cmである。両袖とも袖石は残存していないが、袖石抜取痕が見られ、これらの幅は約42cmを測る。カマド内部はよく焼けて赤化しており、また支脚の石が残っていた。この遺構からは、須恵器壺・短頸壺・提瓶、土師器壺・甕（第7図1～7）が出土している。

4号竪穴建物跡（第7図、写真図版2）

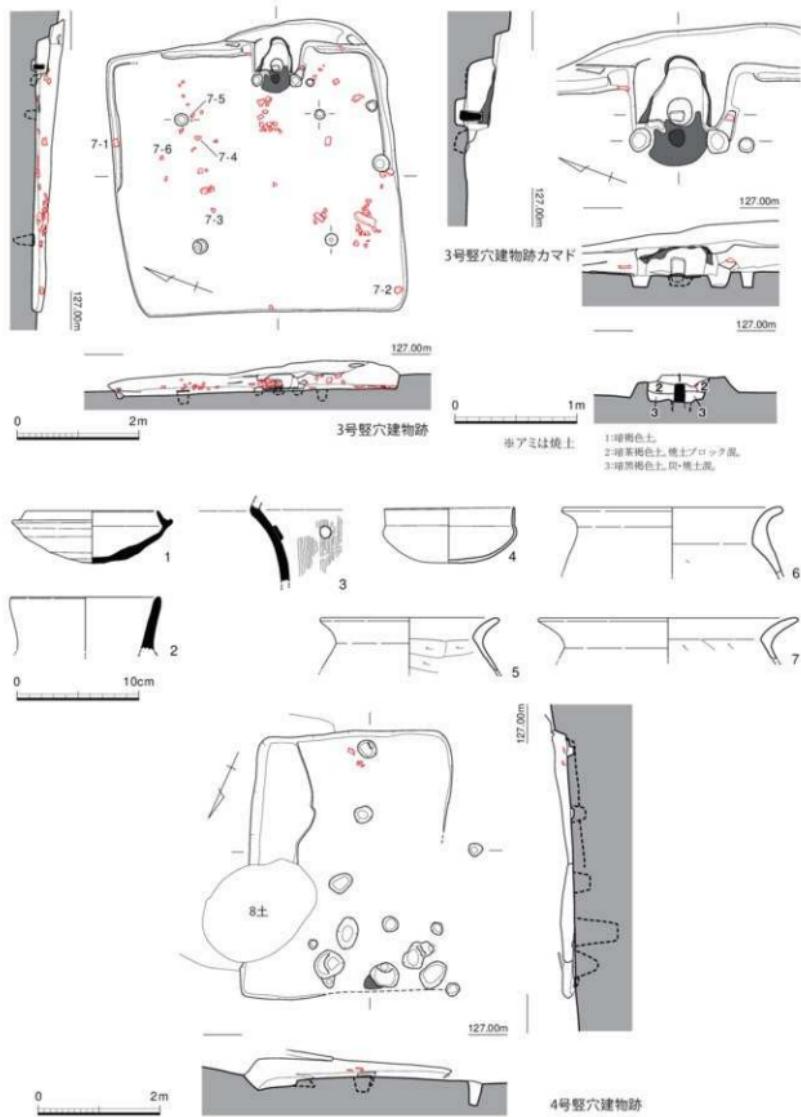
調査区中央部東寄り、3号竪穴建物跡の北で検出された平面長方形を呈すると思われる遺構で、西側の一部を欠き、8号土坑に切られる。南北軸約4.6m、東西軸約3.2m、床面までの深さは最大で約25cmを測る。遺構内には複数のビットが見られるが、主柱穴は不明である。北壁や西寄りに26cm×18cm+ α の範囲で焼土があり、カマドの痕跡と考えられるが、ビットに切られる。この遺構からは土師器片が出土しているが、図示できるものはなかった。

5号竪穴建物跡（第8・9図、写真図版3）

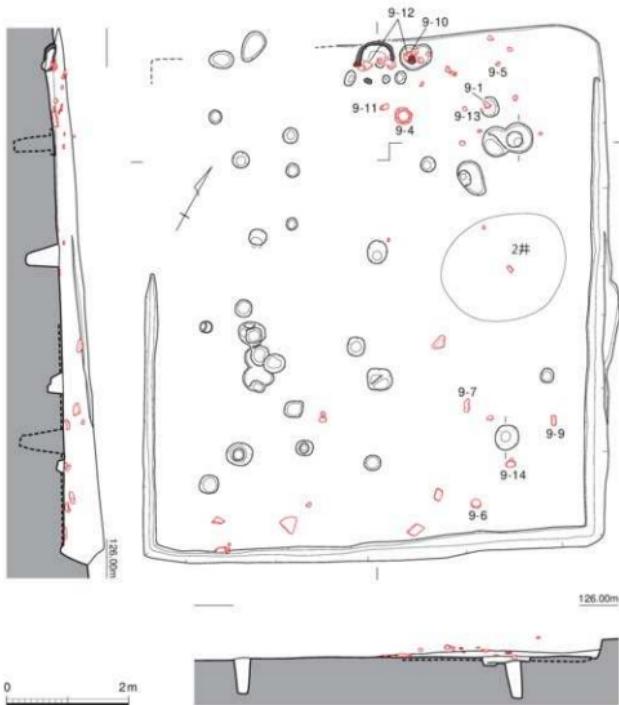
調査区北半東寄り、4号竪穴建物跡の北で検出された平面長方形を呈すると思われる遺構で、西側の一部を欠き、2号井戸に切られる。南北軸約8.6m、東西軸約7.5mと他の竪穴建物跡に比べて規模が大きく、床面までの深さは最大で約68cmを測る。遺構内には多数のビットが見られるが、南北に3つずつ2列並ぶ6本柱（東側中央のビットは2号井戸に切られ不明）と考えられ、深さは約57～71cmを測る。東・南・西壁には壁際溝が見られる。北壁ほぼ中央と考えられる位置にカマドが布設されており、左袖の現存長約30cm、右袖の現存長約26cmである。袖石は現存しないが袖石抜取痕が両袖とも見られ、これらの幅は約66cmを測る。この遺構からは、須恵器壺・甕、土師器壺・壺蓋・甕・高壺・瓶（第9図1～14）のほか、鐵鑄と考えられる破片（第37図11・12）が出土している。

6号竪穴建物跡（第10図、写真図版3）

調査区中央部、3号竪穴建物跡の西で検出された平面不整方形を呈する遺構である。東西軸約4.3m、南北軸約3.2m、床面までの深さは最大で約20cmを測る。遺構内には複数のビットが見



第7図 3・4号竪穴建物跡、カマド、出土遺物実測図 (1/80、1/40、1/4)

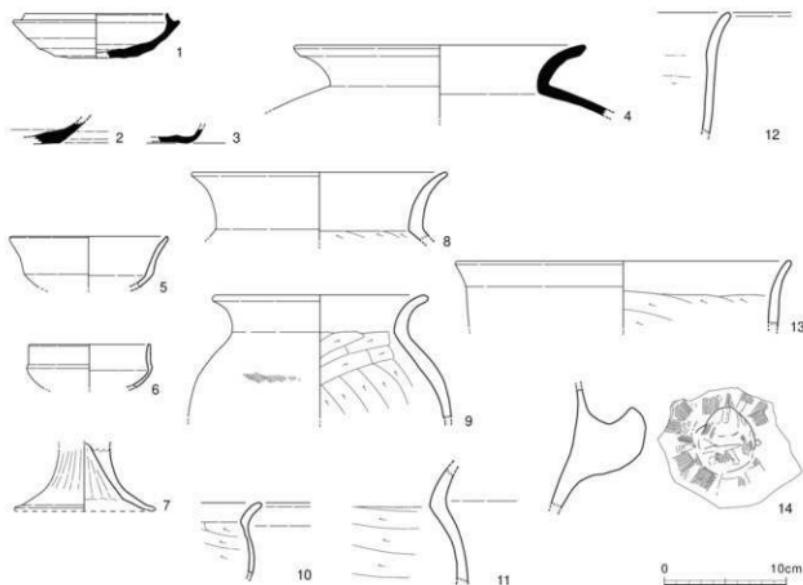


第8図 5号竪穴建物跡実測図(1/80)

られるが、主柱穴は4本で、深さは約9～20cmを測る。東壁ほぼ中央にカマドが布設されており、左袖の現存長約38cm、右袖の現存長約23cm、袖幅は36cmである。袖石は現存しないが袖石抜取痕が両袖とも見られ、これらの幅は約46cmを測る。カマド内部には支脚として使用された甕が口縁を上向きにして残っていた。この遺構からは、須恵器壺、土師器甕（第10図1～5）のほか、瑪瑙製の勾玉（第37図17）が出土している。

7号竪穴建物跡（第11図、写真図版3）

調査区中央部西寄り、6号竪穴建物跡の北で検出された平面正方形を呈する遺構である。東西軸約4.1m、南北軸約3.9m、床面までの深さは最大で約55cmを測る。主柱穴は4本で深さは約46～53cmを測る。北壁やや東寄りにカマドが布設されており、左右とも袖の現存長約82cm、袖幅は焚口で47cmを測る。袖石は両袖とも無く、袖石抜取痕も見られない。カマド内部では支脚の痕跡も認められなかった。この遺構からは、須恵器壺、土師器高壺・甕（第11図1～3）が出土している。



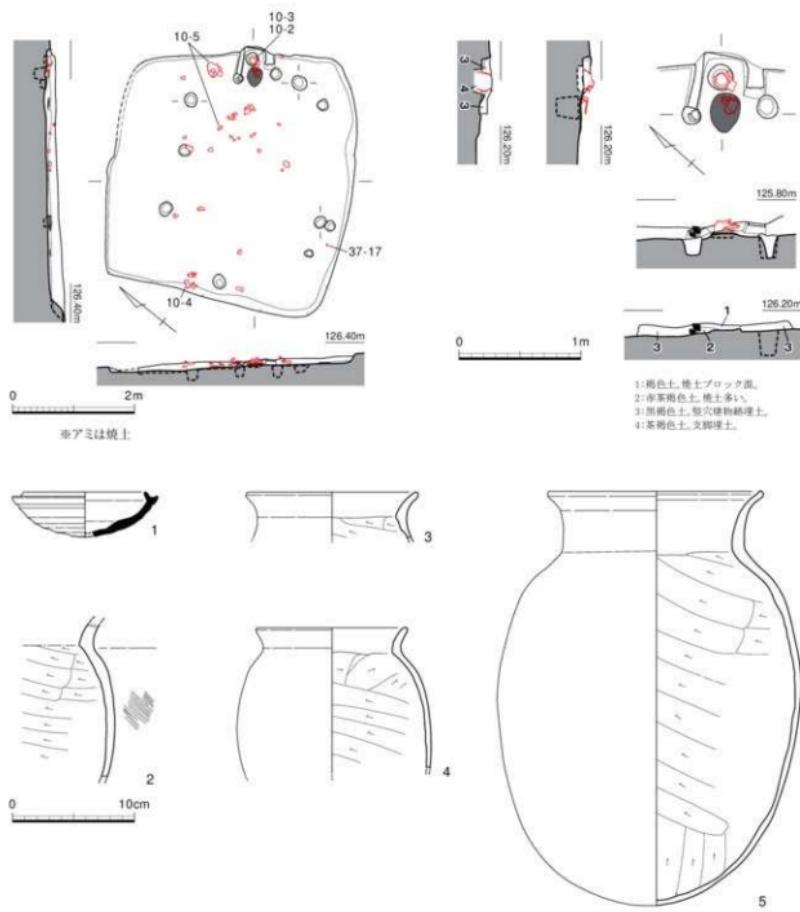
第9図 5号竪穴建物跡出土遺物実測図図(1/4)

8号竪穴建物跡（第11図、写真図版3）

調査区北半東寄り、5号竪穴建物跡の北東で検出された平面正方形を呈する遺構である。南北軸約4.4m、東西軸約4.0m、床面までの深さは最大で約58cmを測る。遺構内には複数のビットが見られるが、主柱穴となりえるものはない。北壁や東寄りにカマドが布設されており、左袖の現存長約38cmを測るが、右袖は10号土坑に切られて残存しない。袖石や袖石抜取痕は確認されなかったが、カマド内部では支脚痕と思われるビットが検出された。この遺構からは、須恵器壺、土師器壺・甕、白磁碗（第11図4～11）が出土している。

9号竪穴建物跡（第12図、写真図版4）

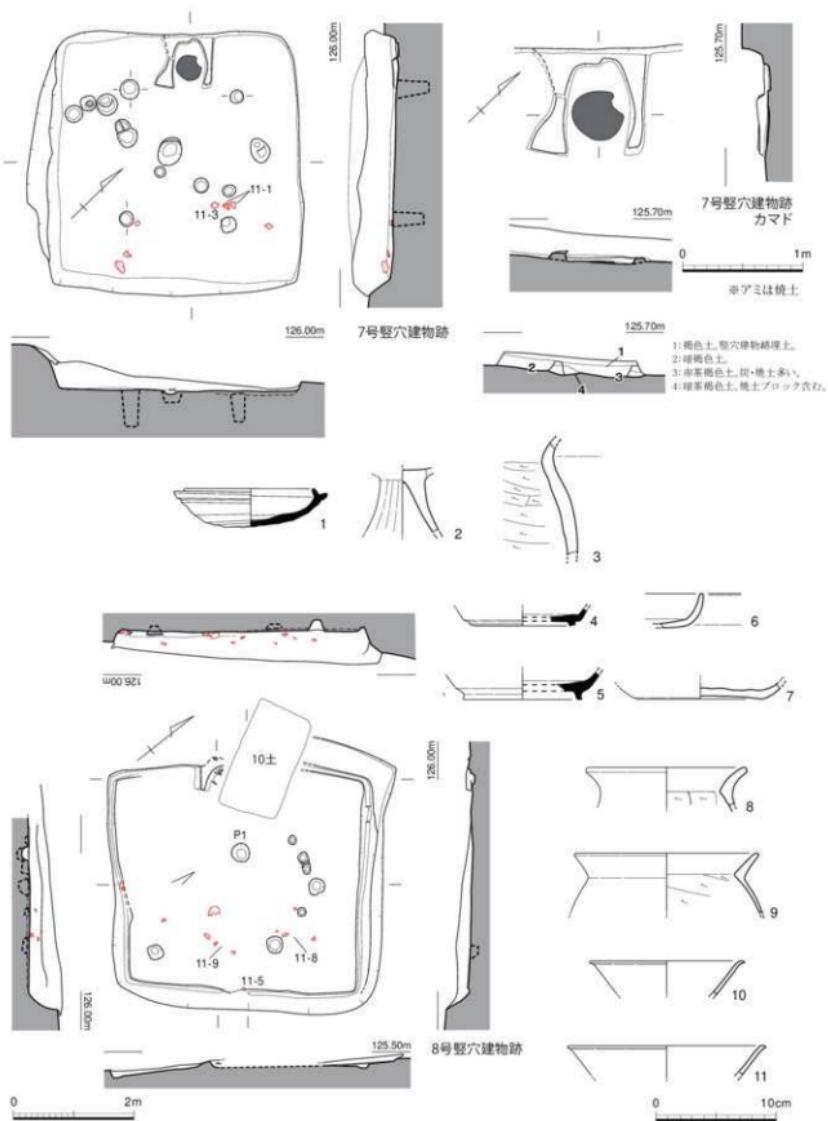
調査区北半東寄り、5号竪穴建物跡の北で検出された平面方形を呈すると思われる遺構で、10号竪穴建物跡および6号掘立柱建物跡に切られる。西側を欠き、南北軸約5.7m、東西軸約4.0m+α、床面までの深さは最大で約23cmを測る。遺構内には複数のビットが見られるが、主柱穴は4本と思われ、これらの深さは約29～58cmを測る。北壁中央と思われる位置にカマドが布設されているが、両袖ともほとんど残存しておらず、46×52cmの焼土の両脇に袖石抜取痕の可能性がある小ビットが検出されており、これらの間隔は40cmを測る。この遺構からは、須恵器壺・壺、土師器甕（第12図1～3）が出土している。



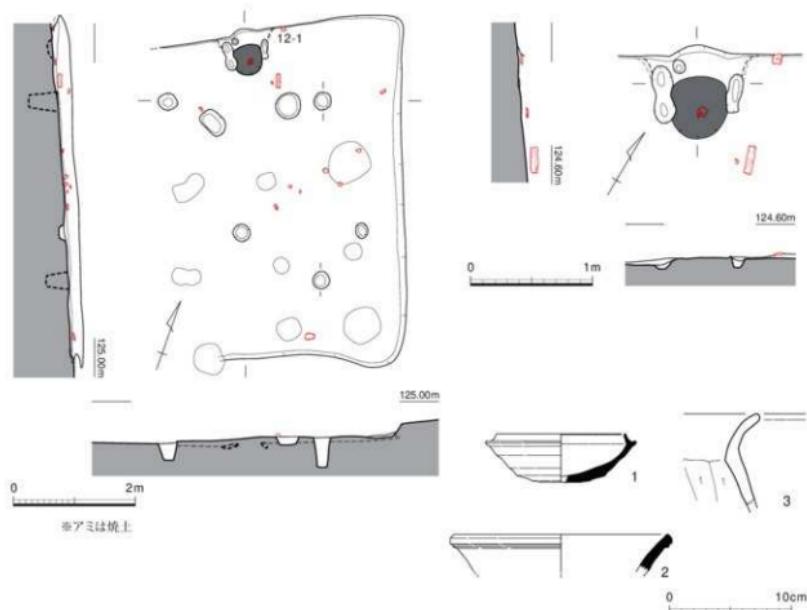
第10図 6号堅穴建物跡、カマド、出土遺物実測図(1/80、1/40、1/4)

10号堅穴建物跡（第13図、写真図版4）

調査区北半東寄り、9号堅穴造構の南で検出された平面方形を呈する遺構で、9号堅穴建物跡を切る。東西軸約5.9m、南北軸約6.2m、床面までの深さは最大で約24cmを測る。主柱穴は4本で、深さは約54～79cmを測る。壁際溝を4周にめぐらす。北壁中央にカマドが布設されており、左袖



第 11 図 7・8号竖穴建物跡、カマド、出土遺物実測図 (1/80、1/40、1/4)



第12図 9号竖穴建物跡、カマド、出土遺物実測図 (1/80, 1/40, 1/4)

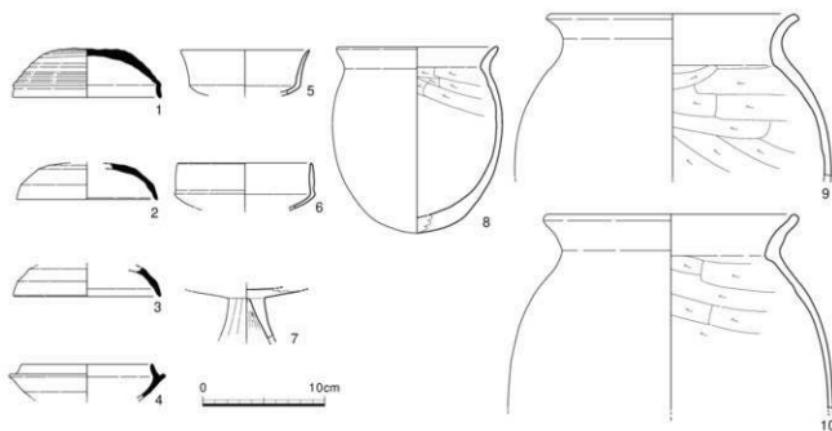
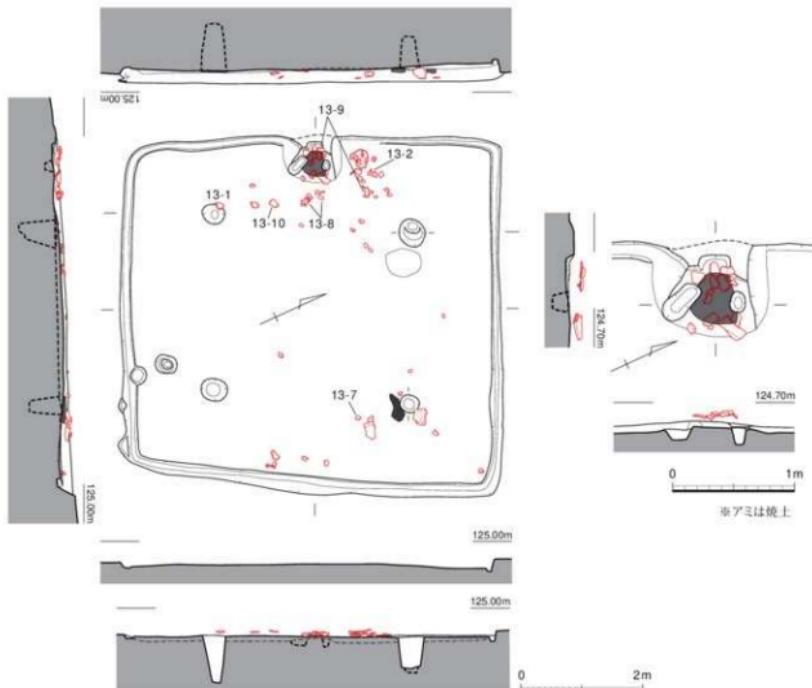
の現存長約16cm、右袖の現存長約34cmである。袖石は残存していないが、両袖とともに袖石抜取痕が見られ、これらの幅は約32cmを測る。右袖の抜取痕付近で袖石と思われる石が検出されている。カマド内部では支脚またはその痕跡は見つからなかつた。この遺構からは、須恵器蓋坏、土師器蓋坏・高坏・甕（第13図1～10）のほか、鉄鐵（第37図8・9）が出土している。

11号竖穴建物跡（第14図、写真図版4）

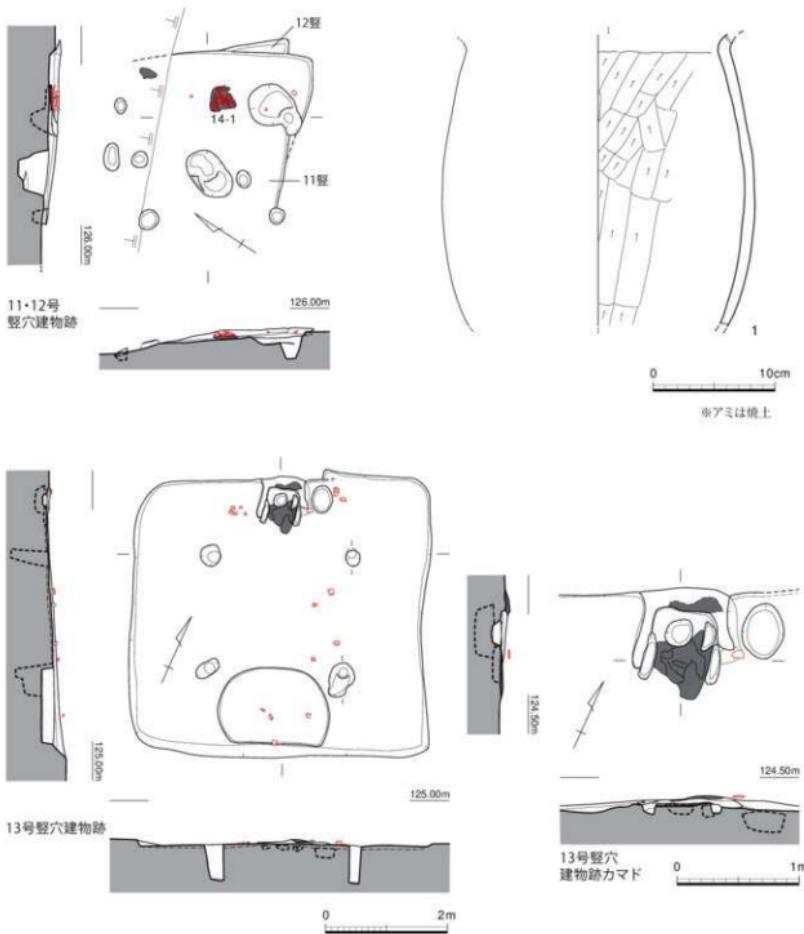
調査区北半東端、9号竖穴建物跡の北東で検出された遺構で、12号竖穴建物跡の大部分を切る。西側および北側を大きく欠くが、平面は方形または長方形を呈すると考えられる。東西軸約1.4m + α、南北軸約2.3m + α、床面までの深さは最大で約10cmを測る。主柱穴は不明である。遺構内東寄りに焼土が見られるが、カマドは検出されなかつた。この遺構からは、土師器甕（第14図1）が出土している。

12号竖穴建物跡（第14図、写真図版4）

調査区北半東端、9号竖穴建物跡の北東で検出された遺構で、大部分が11号竖穴建物跡に切ら

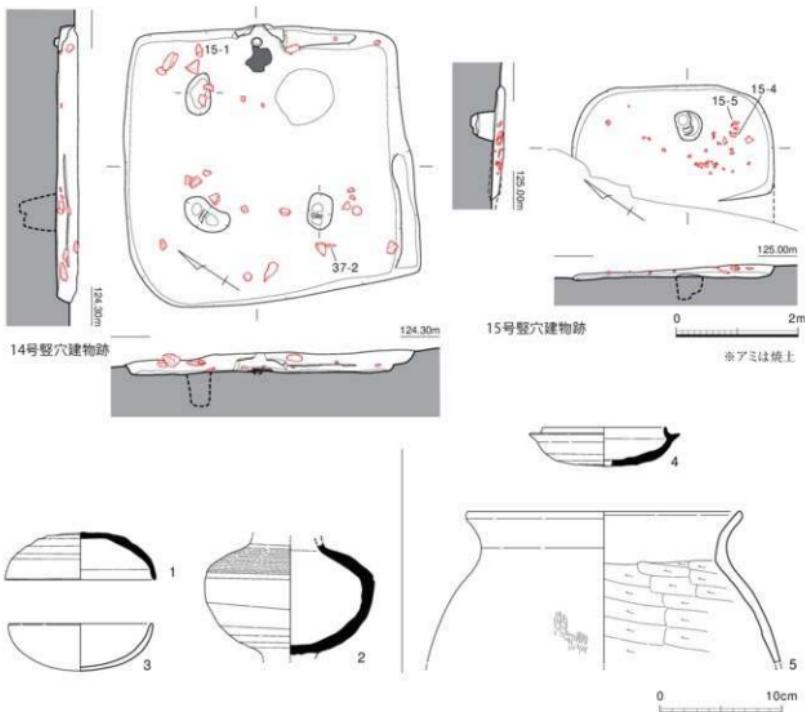


第13図 10号整穴跡、カマド、出土遺物実測図 (1/80、1/40、1/4)



第14図 11～13号竖穴建物跡、カマド、出土遺物実測図 (1/80, 1/40, 1/4)

れているため全容は不明であるが、平面は方形または長方形を呈すると考えられる。東西軸約2.8m + α 、南北軸約1.1m + α 、床面までの深さは最大で約10cmを測る。主柱穴は不明である。遺構内東寄りの削平された部分で焼土の痕跡が検出されている。この遺構からは遺物は出土しなかつた。



第15図 14・15号竪穴建物跡、出土遺物実測図 (1/80、1/4)

13号竪穴建物跡（第14図、写真図版4）

調査区北半西寄り、10号竪穴建物跡の西で検出された、平面正方形を呈する遺構である。東西軸約4.9m、南北軸約4.4m、床面までの深さは最大で約23cmを測る。主柱穴は4本で、深さは約42～66cmを測る。南側の2つの柱穴には柱痕が認められた。北壁中央にカマドが布設されており、左袖の現存長約62cm、右袖の現存長約50cm、袖幅約52cmである。両袖とも袖石は残存していないが、抜取痕が検出されており、袖石幅は約45cmを測る。カマド内部では支脚痕と思われるピットが検出された。この遺構からは土師器片が出土しているが、図示できるものはなかった。

14号竪穴建物跡（第15図、写真図版5）

調査区北半のほぼ中央、13号竪穴建物跡の北東で検出された、平面正方形を呈する遺構である。

東西軸約4.0m、南北軸約4.3m、床面までの深さは最大で約35cmを測る。主柱穴は4本と考えられるうち1つは16号土坑に切られている。その他の柱穴の深さは約57~60cmを測る。東壁中央にカマドが布設されており、左袖の現存長約8cm、右袖の現存長約22cm、袖幅は壁際で34cmを測る。袖石・抜取痕とともに検出されていないが、右袖そばで袖石の可能性がある石が検出されている。カマド内部では支脚痕と思われるピットが検出された。この遺構からは、須恵器壺蓋・脚付壺、土師器壺（第15図1~3）のほか、鉄鎌（第37図2）が出土している。

15号竪穴建物跡（第15図、写真図版5）

調査区北半東端部、11・12号竪穴建物跡の北西で検出された、平面隅丸長方形を呈すると思われる遺構である。南側を16・17号竪穴建物跡に切られる。東西軸約3.0m、南北軸約1.8m+ α 、床面までの深さは最大で約19cmを測る。遺構内でピットが1つ検出されているが、その位置からみて主柱穴ではないと思われる。カマド・焼土とも検出されていない。この遺構からは、須恵器壺、土師器壺（第15図4・5）が出土している。

16号竪穴建物跡（第16図、写真図版5）

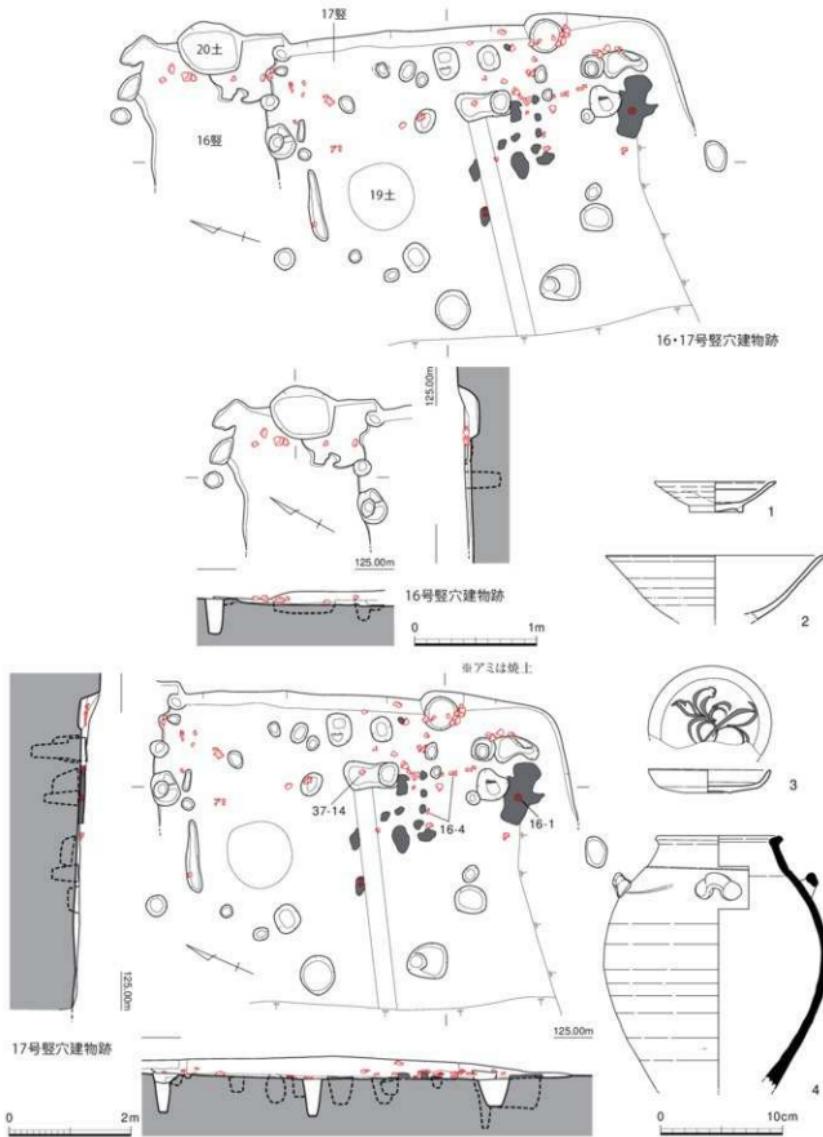
調査区北半東端部、15号竪穴建物跡の西隣で検出された遺構で、15号竪穴建物跡を切り、17号竪穴建物跡・20号土坑に切られる。西半を欠くが、平面は方形または長方形を呈すると考えられる。東西軸約2.5m+ α 、南北軸約2.5m+ α 、床面までの深さは最大で約8cmを測る。主柱穴は不明である。カマド・焼土とも検出されていない。この遺構からは、鉄滓1点（第37図13）が出土している。

17号竪穴建物跡（第16図、写真図版5・6）

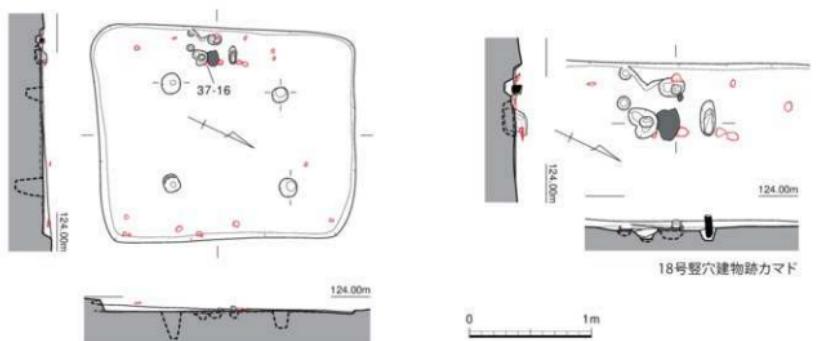
調査区北半東端部、15号竪穴建物跡の西隣で検出された遺構で、15・16号竪穴建物跡を切り、19号土坑に切られる。南側の一部と西側を欠くが、平面は方形を呈すると考えられる。東西軸約2.0m+ α 、南北軸約6.4m+ α 、床面までの深さは最大で約33cmを測る。主柱穴は南北軸方向に3本以上が並ぶと思われるが、それに対応する西側の柱穴列は確認されていない。カマドは検出されていないが、南東隅付近に105×44cmの焼土が見られる。この遺構からは、須恵器四耳壺、白磁碗・小皿、青磁小皿（第16図1~4）のほか、鉄滓2点（第37図14・15）が出土している。

18号竪穴建物跡（第17図、写真図版6）

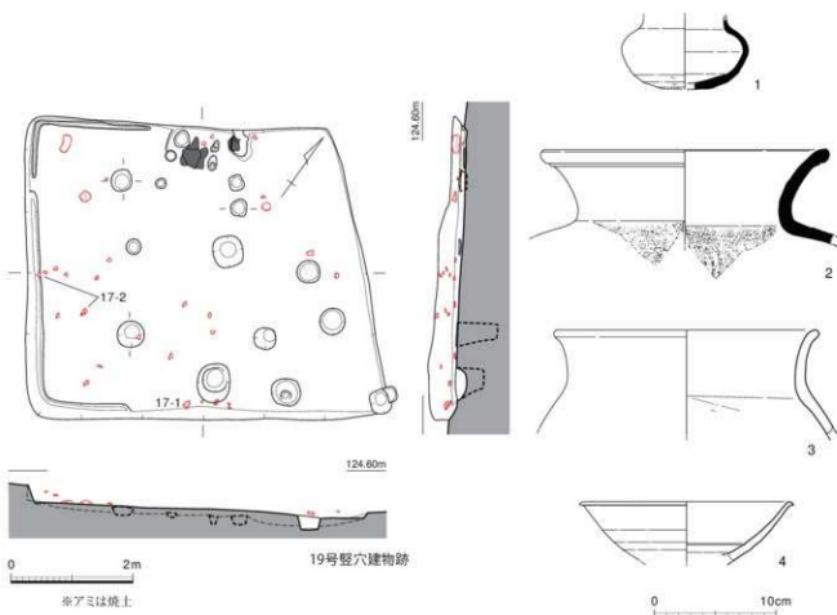
調査区北半のほぼ中央、14号竪穴建物跡の北で検出された、平面長方形を呈する遺構である。東西軸約3.6m、南北軸約4.3m、床面までの深さは最大で約16cmを測る。主柱穴は4本で、深さは約27~46cmを測る。西壁中央にカマドが布設されており、両袖とも残存しないが、右袖の位置に袖石が、左袖の位置には袖石抜取痕が残っている。袖石（抜取痕）の幅は34cmを測る。カマド内部では支脚の石が残っていた。この遺構からは、土師器や須恵器の破片が出土しているが、図示できるものはなかった。ほかに鉄滓1点（第37図16）が出土している。



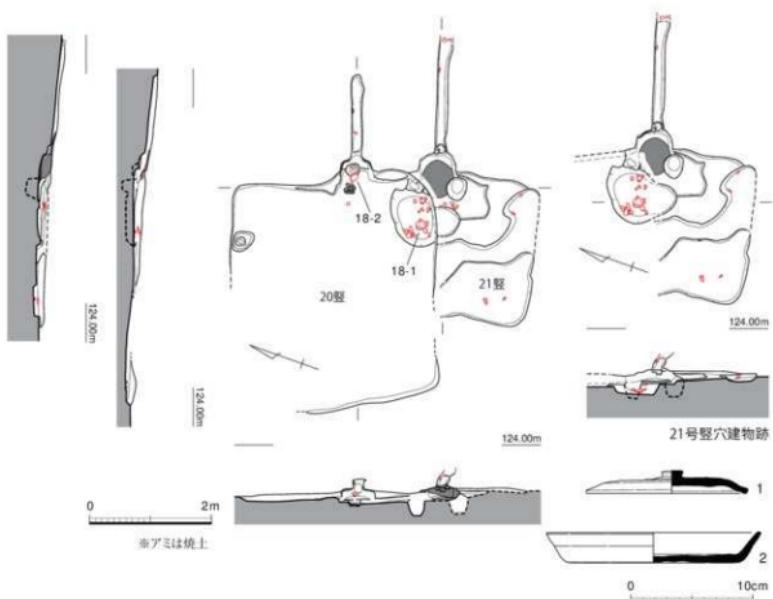
第16図 16・17号竪穴建物跡、出土遺物実測図 (1/80, 1/4)



18号整穴建物跡



第17図 18・19号整穴建物跡、カマド、出土遺物実測図(1/80、1/40、1/4)



第18図 20・21号竪穴建物跡、出土遺物実測図 (1/80, 1/40, 1/4)

19号竪穴建物跡（第17図、写真図版6）

調査区北半西寄り、14号竪穴建物跡の西で検出された、平面不整長方形を呈する遺構である。東西軸約5.9m、南北軸約5.0m、床面までの深さは最大で約39cmを測る。南北壁際の一部と西壁際に壁際溝がめぐっている。主柱穴は4本で、深さは約12~68cmを測る。北壁中央にカマドが布設されており、両袖および袖石は残存しないが、焼土の両脇に袖石抜取痕と思われるピットが見られ、その幅は54cmを測る。カマド内部では支脚の痕跡は検出できなかった。この遺構からは、須恵器甕・壺、土師器甕、白磁碗（第17図1~4）が出土している。

20号竪穴建物跡（第18図、写真図版6・7）

調査区北半中央部、14号竪穴建物跡の北で検出された、平面方形を呈すると思われる遺構であるが、北側・西側を大きく欠く。21号竪穴建物跡を切る。東西軸約3.7m、南北軸約3.4m、床面までの深さは最大で約13cmを測る。主柱穴は検出されていない。東壁南寄りに、壁より張り出して煙道を持つタイプのカマドが布設されている。両袖とも残存せず、袖石や袖石抜取痕も確認されていない。カマド内部では支脚痕と思われるピットが検出されている。煙道の長さは約1.3mを測る。この遺構からは、土師器破片（図示不能）のほか、須恵器蓋壺（第18図1・2）が出土している。

21号竪穴建物跡（第18図、写真図版6・7）

調査区北半中央部、20号竪穴建物跡の南で検出された、平面方形を呈すると考えられる遺構で、北半を20号竪穴建物跡に切られる。東西軸約2.4m、南北軸約2.2m+ α 、床面までの深さは最大で約7cmを測る。主柱穴は検出されていない。東壁に、壁より張り出して煙道を持つタイプのカマドが布設されている。両袖とも残存しないが、袖石抜取痕は確認され、その幅は40cmを測る。カマド内部では支脚痕は検出されていない。煙道は東端を欠くが、長さ約1.8m+ α を測る。この遺構からは須恵器や土師器の破片が出土しているが、図示できるものはなかった。

22-1・2・3号竪穴建物跡（第19図、写真図版7）

調査区北半部西寄り、20・21号竪穴建物跡の西で検出された遺構で、3基の竪穴建物跡が重なっている。切り合い関係は、22-3→22-2→22-1号である。なお、22-2号竪穴建物跡は23号竪穴建物跡を切るが、22-3号竪穴建物跡と23号竪穴建物跡の切り合い関係は不明である。

22-1号竪穴建物跡は、東西軸約2.9m、南北軸約4.4mの平面長方形を呈し、床面までの深さは最大で約14cmを測る。主柱穴は竪穴内の中央よりやや東で2本検出され、深さは約10~35cmを測る。南東・北西隅および西壁に壁際溝が見られる。東壁中央部付近で焼土が見られるものの、カマドは不明である。

22-2号竪穴建物跡は、東西軸約5.4m、南北軸約4.7mの平面ほぼ正方形を呈し、床面までの深さは最大で約27cmを測る。主柱穴は西側の2つが検出されており、深さは約50~55cmを測る。本来は4本柱と考えられるが、東側の2本については不明である。北西隅に壁際溝が見られる。カマド・焼土は検出されていない。

22-3号竪穴建物跡は、東西軸約2.3m+ α 、南北軸約4.6mの平面方形または長方形と思われ、床面までの深さは最大で約26cmを測る。主柱穴は不明である。東壁中央付近に焼土が見られるものの、カマドは不明である。

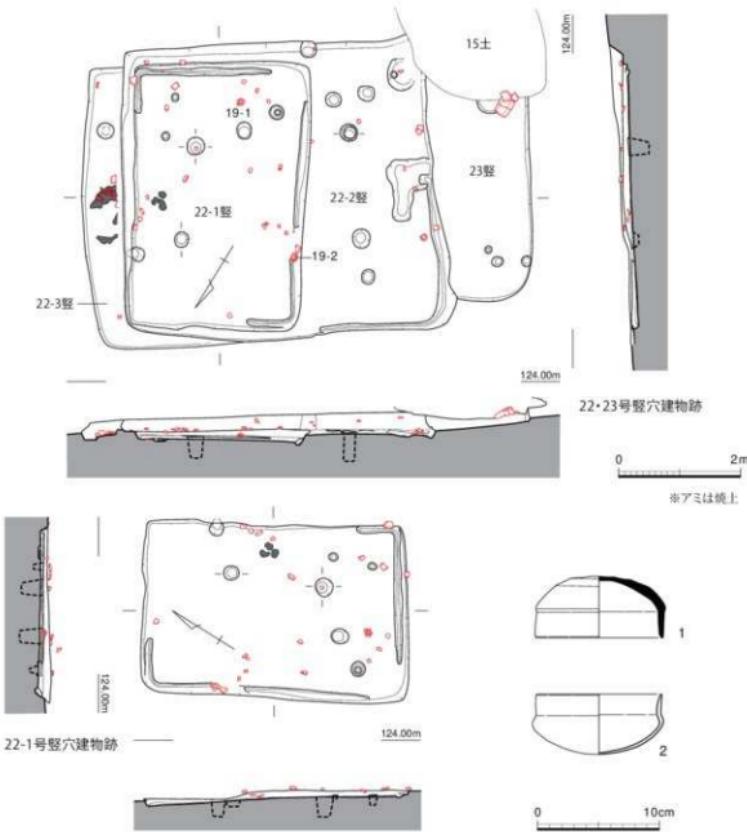
22-1号竪穴建物跡から、須恵器壺蓋、土師器壺（第19図1・2）が出土している。

23号竪穴建物跡（第23図、写真図版7）

調査区北半西寄り、20・21号竪穴建物跡の西で検出された遺構で、東側の大部分を22-1・2・3号竪穴建物跡に大きく切られる。平面方形または長方形を呈すると考えられる。東西軸約1.4m+ α 、南北軸約3.4m+ α 、床面までの深さは最大で約9cmを測る。主柱穴やカマド・焼土は不明である。この遺構からは土師器片が出土しているが、図示できるものはなかった。

24号竪穴建物跡（第20図、写真図版7・8）

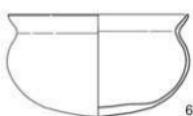
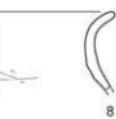
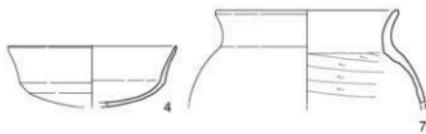
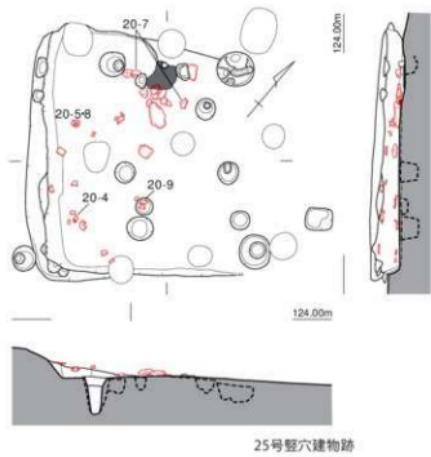
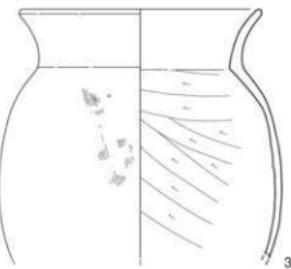
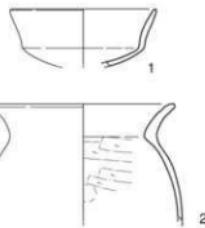
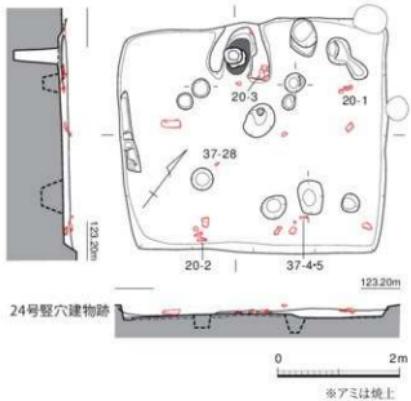
調査区北半西寄り、22-1・2・3号竪穴建物跡の北で検出された平面方形を呈する遺構で、3号掘立柱建物跡に切られる。東西軸約4.2m、南北軸約3.8m、床面までの深さは最大で約26cmを測る。主柱穴は4本で、深さは約18~39cmを測る。西壁際にわずかに壁際溝が見られる。北壁中央にカマドが布設されており、左袖の現存長約78cm、右袖の現存長約90cm、袖幅は約50cmを測る。袖石や袖石抜取痕は検出されていない。この遺構からは、土師器高壺・甕（第20図1~3）のほか、須恵器片（図示不能）、摘鍊（第37図4・5）が出土している。



第19図 22-1～3・23号竖穴建物跡、出土遺物実測図 (1/80、1/4)

25号竖穴建物跡（第20図、写真図版8）

調査区北半西寄り、24号竖穴建物跡の西で検出された、平面方形または長方形を呈すると考えられる遺構で、東側を欠き、2号掘立柱建物跡に切られる。東西軸約3.4m+α、南北軸約4.2m、床面までの深さは最大で約50cmを測る。遺構内に複数のビットが見られるが、主柱穴は不明である。北壁中央にカマドが布設されているが、両袖とも残存しない。右袖のみ袖石が残存し、左袖には袖石抜取痕が認められ、その幅は約50cmを測る。カマド内部では支脚痕は検出されなかった。この遺構からは、須恵器片（図示不能）のほか、土師器壺・高壺・甕（第20図4～9）が出土している。



第20図 24・25号竪穴建物跡、出土遺物実測図 (1/80、1/4)

26号竪穴建物跡（第21図、写真図版8）

調査区北半西端、25号竪穴建物跡の西で検出された、平面方形または長方形を呈すると考えられる遺構で、東半を欠く。東西軸約 $2.8\text{ m} + \alpha$ 、南北軸約 5.8 m 、床面までの深さは最大で約30cmを測る。遺構内に複数のピットが見られるが、主柱穴は不明である。カマド・焼土は検出されなかった。この遺構からは、須恵器片（図示不能）のほか、土師器壺蓋・高壺・甕（第21図1～3）が出土している。

27号竪穴建物跡（第21図、写真図版8・9）

調査区北半西端、26号竪穴建物跡の北で検出された、平面方形または長方形を呈すると考えられる遺構で、東半を欠く。東西軸約 $1.6\text{ m} + \alpha$ 、南北軸約 $5.8\text{ m} + \alpha$ 、床面までの深さは最大で約27cmを測る。遺構内に複数のピットが見られるが、主柱穴は不明である。カマド・焼土は検出されなかった。この遺構からは、須恵器壺蓋・甕・甌、土師器甕（第21図4～10）が出土している。

28号竪穴建物跡（第22図、写真図版9）

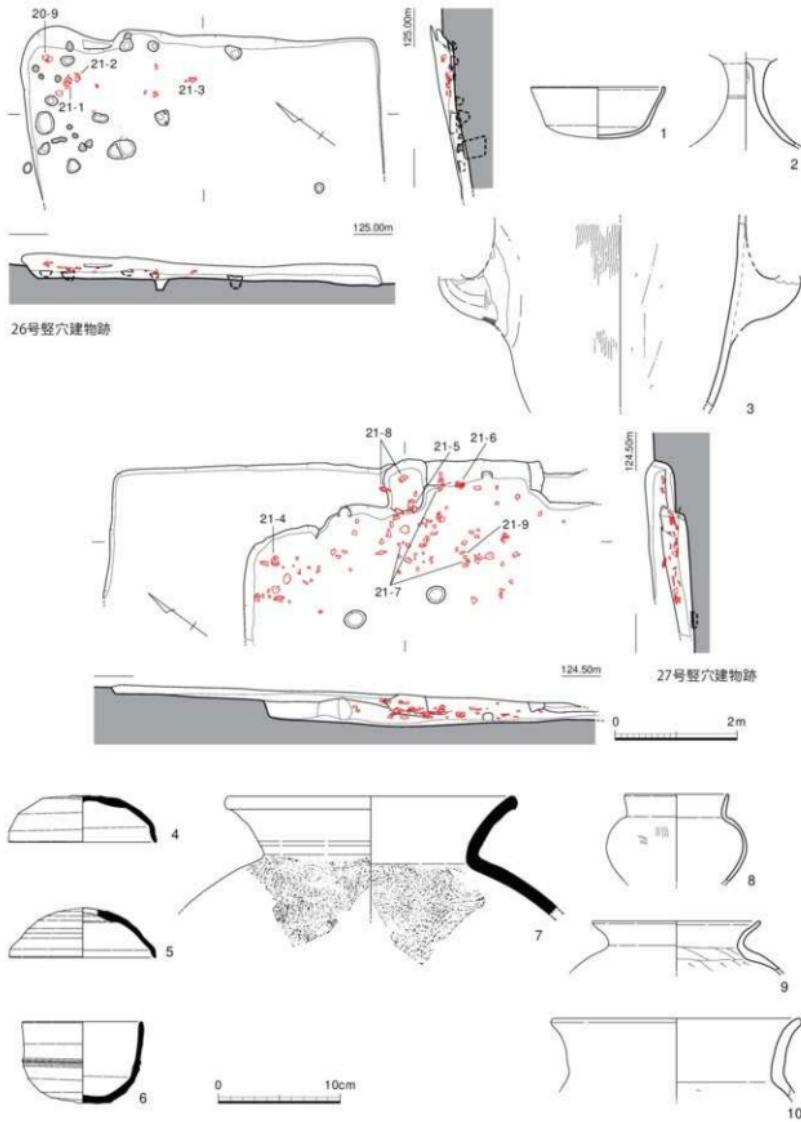
調査区北半中央部、24号竪穴建物跡の北で検出された、平面方形を呈する遺構である。東西軸約 3.9 m 、南北軸約 4.0 m 、床面までの深さは最大で約30cmを測る。壁際溝が四周にめぐり、小ピットが規則的に穿たれている。主柱穴は4本で、深さは約35～42cmを測る。北壁中央にカマドが布設されており、両袖ともに長さ約90cm、袖幅は約75cmを測る。袖石・袖石抜取痕は検出されなかった。カマド内部では支脚としての甕が残っていた。この遺構からは、須恵器短頸壺、土師器壺・高壺・甕（第22図1～5）が出土している。他に石製紡錘車も1点出土したが、調査中の大雨により所在不明となった。

29号竪穴建物跡（第22図、写真図版9）

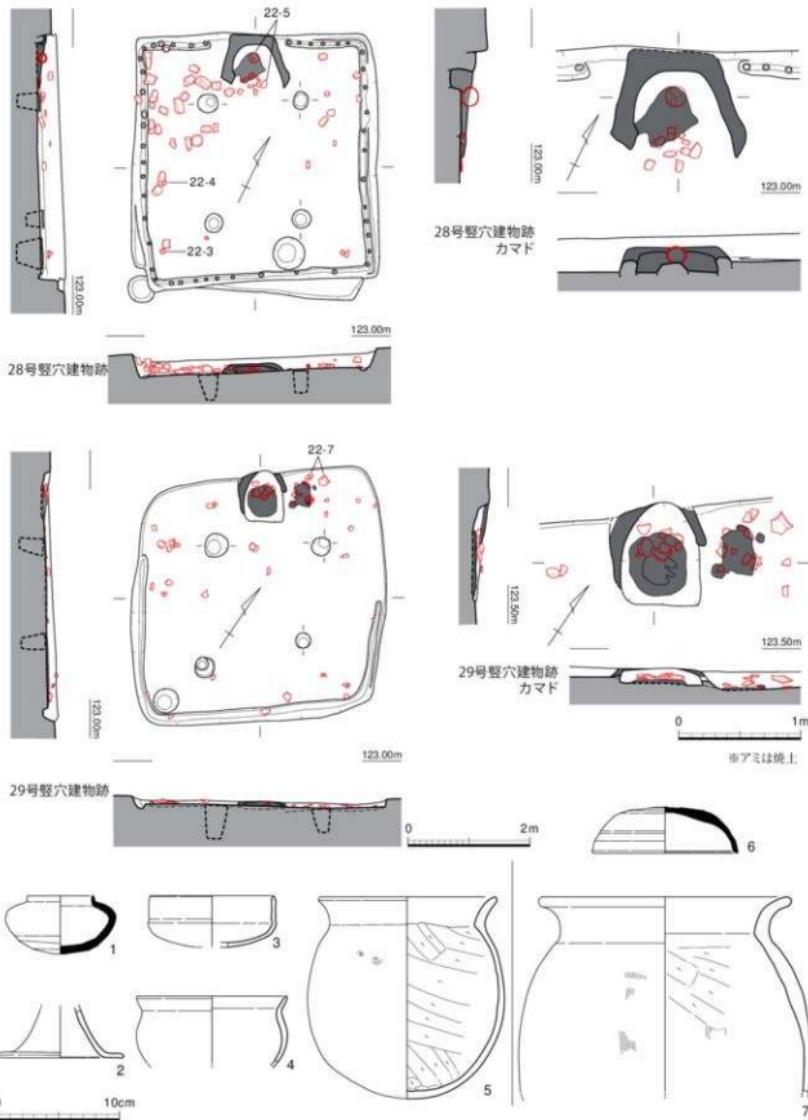
調査区北半中央部、28号竪穴建物跡の北西で検出された、平面方形を呈する遺構である。東西軸約 3.8 m 、南北軸約 3.9 m 、床面までの深さは最大で約15cmを測る。遺構の南半分には壁際溝がめぐる。主柱穴は4本で、深さは約38～70cmを測る。北壁中央にカマドが布設されており、左袖の現存長約55cm、右袖の現存長約32cm、袖幅は約60cmである。袖石・袖石抜取痕は確認されていない。支脚痕も認められないが、支脚のあるべき位置付近に土器片が多く見られ、甕が支脚であった可能性がある。この遺構からは、須恵器壺蓋、土師器甕（第22図6・7）が出土している。

30号竪穴建物跡（第23図、写真図版9）

調査区北半中央部、28号竪穴建物跡の北東で検出された、平面方形を呈する遺構で、31号竪穴建物跡を切る。東西軸約 3.3 m 、南北軸約 3.5 m 、床面までの深さは最大で約23cmを測る。周囲に断続的に壁際溝がめぐり、28号竪穴建物跡と同様な小ピットが、数は少いものの穿たれている。遺構内に複数のピットが見られるが、主柱穴にはならない。東壁南寄りに壁から若干張り出すタイプのカマドが布設されているが、焼土が見られるのみで、袖・袖石・袖石抜取痕は検出されなかつた。この遺構からは、須恵器破片（図示不能）のほか、土師器甕（第23図1・2）が出土している。



第21図 26・27号整穴建物跡、出土遺物実測図 (1/80、1/4)



第22図 28・29号竖穴建物跡、カマド、出土遺物実測図 (1/80、1/40、1/4)

31号竪穴建物跡（第23図、写真図版9）

調査区北半中央部、28号竪穴建物跡の北東で検出された、平面方形または長方形を呈すると思われる遺構で、30号竪穴建物跡に大部分を切られているため規模の詳細は不明であるが、東西軸約 $1.5\text{ m} + \alpha$ 、南北軸約 $3.2\text{ m} + \alpha$ 、床面までの深さは最大で約18cmを測る。北壁やや東寄りにカマドが布設されており、左袖は残存しないが、右袖の現存長約44cmである。袖石・袖石抜取痕は認められなかった。この遺構からは、図示可能な遺物は出土していない。

32号竪穴建物跡（第23図、写真図版9・10）

調査区北半東寄り、30・31号竪穴建物跡の北で検出された、平面方形を呈すると思われる遺構であるが、西半を欠く。33号竪穴建物跡を切る。東西軸約2.5m、南北軸約3.2m、床面までの深さは最大で約13cmを測る。遺構内に複数のピットが見られるが、浅いため、主柱穴とは考えられない。東壁やや南寄りに、壁から張り出し、煙道を持つタイプのカマドが布設されており、両袖とも残存していないが、袖石抜取痕は認められ、その幅は約64cmを測る。袖石は右袖にのみ残存しており、左袖には袖石抜取痕が見られ、これらの幅は約42cmを測る。煙道は長さ約1.0mである。この遺構からは土師器片が出土しているが、図示不能である。

33号竪穴建物跡（第23図、写真図版9・10）

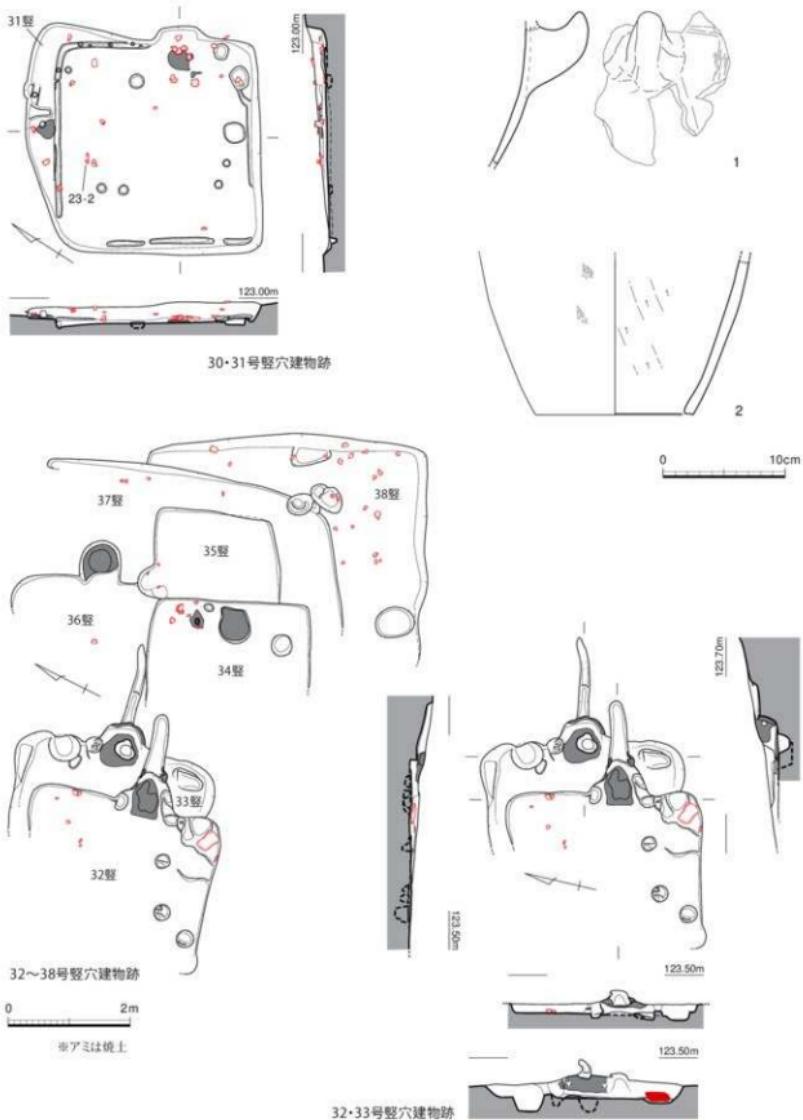
調査区北半東寄り、30・31号竪穴建物跡の北で検出された、平面方形を呈すると考えられる遺構である。西半を欠き、32号竪穴建物跡に大きく切られているため、規模の詳細は不明であるが、東西軸約3.4m、南北軸約1.6m + α 、床面までの深さは最大で約28cmを測る。主柱穴は不明である。東壁中央に32号竪穴建物跡同様、壁から張り出し、煙道を持つタイプのカマドが布設されており、両袖とも残存していないが、左袖の袖石は残存していた。煙道は長さ約1.3mである。カマド内部では支脚痕と考えられるピットが検出された。この遺構からは、土師器や須恵器の破片が出土しているが、図示不能である。

34号竪穴建物跡（第24図、写真図版9・10）

調査区北半東寄り、32・33号竪穴建物跡の東で検出された平面方形を呈すると思われる遺構で、西半を欠き、35～38号竪穴建物跡を切る。東西軸約 $1.7\text{ m} + \alpha$ 、南北軸約2.6m、床面までの深さは最大で約7cmを測る。南壁付近でピットが1つ検出されているが、主柱穴となるかは不明である。東壁中央に焼土が見られることからカマドが布設されていたと考えられるが、袖や袖石・袖石抜取痕は確認できなかった。この遺構からは、須恵器壺、土師器壺（第24図1・2）が出土している。

35号竪穴建物跡（第24図、写真図版9・10）

調査区北半東寄り、32・33号竪穴建物跡の東で検出された平面方形を呈すると思われる遺構で、36～38号竪穴建物跡を切り、34号竪穴建物跡に切られる。東西軸約 $1.5\text{ m} + \alpha$ 、南北軸約2.0mと小さな竪穴遺構で、床面までの深さは最大で約12cmを測る。主柱穴は検出されなかった。北壁にカマドのような張り出しが見られるが、焼土は確認されていない。この遺構からは遺物は出土しなかった。



第23図 30～33号竪穴建物跡、出土遺物実測図(1/80、1/4)

36号竪穴建物跡（第24図、写真図版9・10）

調査区北半東寄り、32・33号竪穴建物跡の東で検出された平面方形を呈すると思われる遺構で、37・38号竪穴建物跡を切り、34・35号竪穴建物跡に切られる。東西軸約0.5m+ α 、南北軸約2.0m+ α 、床面までの深さは最大で約8cmを測る。主柱穴は検出されなかった。東壁に焼土を伴う張り出しが見られ、カマドと考えられるが、袖や袖石・袖石抜取痕、また煙道は確認されていない。この遺構からは、須恵器破片（図示不能）や土師器壺（第24図3・4）のほか、鉄鏹と考えられる破片（第37図10）が出土している。

37号竪穴建物跡（第24図、写真図版9・10）

調査区北半東寄り、32・33号竪穴建物跡の東で検出された平面方形を呈すると思われる遺構で、38号竪穴建物跡を切り、34～36号竪穴建物跡に切られる。東西軸約2.1m+ α 、南北軸約4.7m+ α 、床面までの深さは最大で約15cmを測る。床面の大部分を34～36号竪穴建物跡に切られているため、主柱穴は検出されなかった。焼土等も見られないため、カマドの有無は不明である。この遺構からは土師器破片が出土しているが、図示不能である。

38号竪穴建物跡（第25図、写真図版9・10・11）

調査区北半東寄り、32・33号竪穴建物跡の東で検出された遺構で、34～37号竪穴建物跡に切られる。平面は方形を呈し、東西軸約3.8m+ α 、南北軸約4.7m、床面までの深さは最大で約45cmを測る。主柱穴は4本で、深さは約43～71cmを測る。北壁付近に焼土が見られ、カマドが存在したと思われるが、袖や袖石・袖石抜取痕等は確認されなかった。この遺構からは、須恵器壺蓋、土師器甕・甌（第25図1～3）のほか、鉄鏹1点（第37図3）と石製紡錘車1点（第37図18）が出土している。

39号竪穴建物跡（第26図、写真図版11）

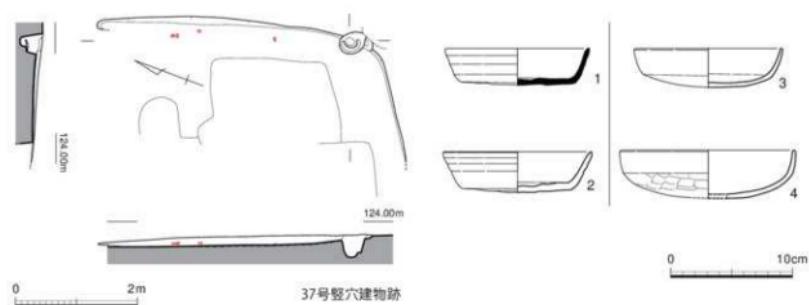
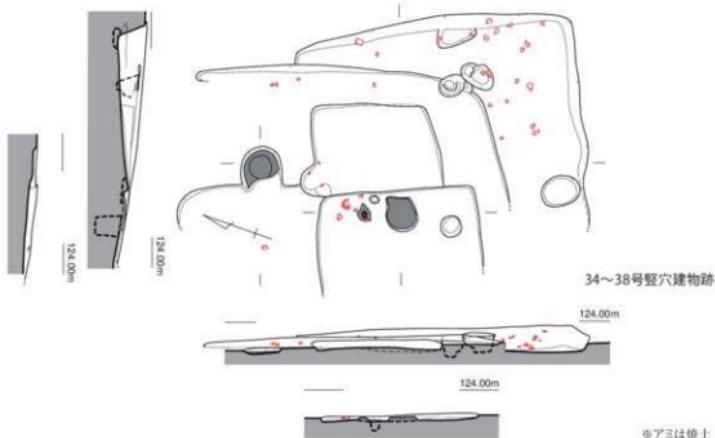
調査区北端中央部、29号竪穴建物跡の北で検出された遺構で、北側は調査区外へ続く。平面方形を呈すると考えられ、40・41号竪穴建物跡を切る。東西軸約3.5m、南北軸約2.8m+ α 、床面までの深さは最大で約3cmを測る。主柱穴は検出されなかった。南壁中央に焼土が見られ、カマドが存在したと思われるが、袖や袖石・袖石抜取痕等は確認されなかった。この遺構からは、須恵器壺、土師器高壺・甌（第26図1～3）が出土している。

40号竪穴建物跡（第26図、写真図版11）

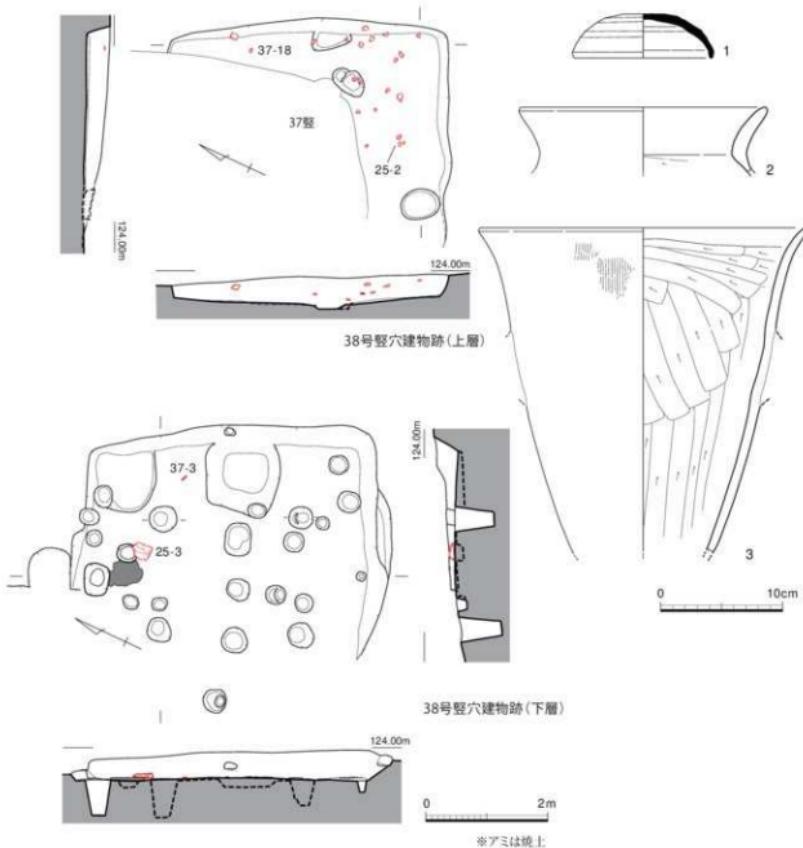
調査区北端中央部、29号竪穴建物跡の北で検出された竪穴遺構で、北側は調査区外へ続く。41号竪穴建物跡を切るが、大部分を39号竪穴建物跡に切られており、東西軸約3.5m、南北軸約2.8m+ α 、床面までの深さは最大で10cmを測る平面方形を呈する遺構と思われるが、主柱穴等は不明である。また、焼土等も検出されなかったため、カマドの有無は不明である。

41号竪穴建物跡（第26図、写真図版11）

調査区北端中央部、29号竪穴建物跡の北で検出された遺構で、北側は調査区外へ続く。平面方



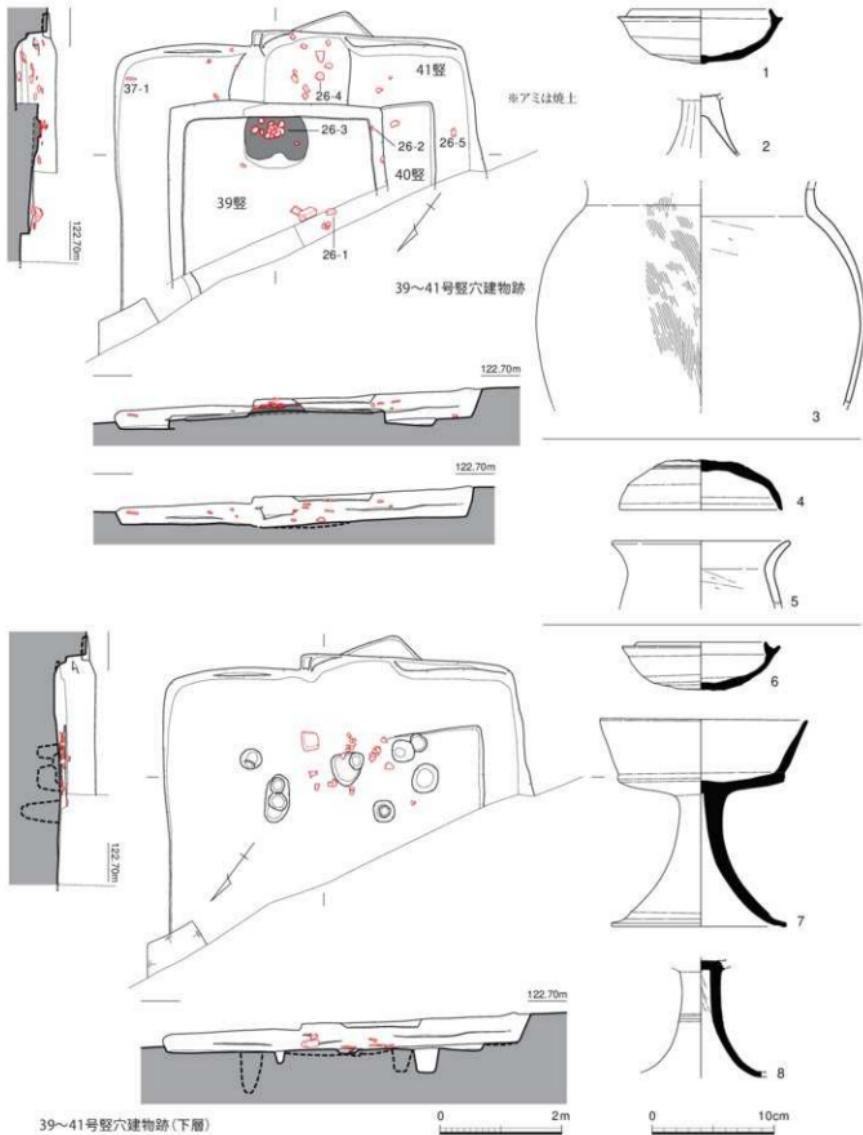
第24図 34~37号竪穴建物跡、出土遺物実測図(1/80、1/4)



第25図 38号竪穴建物跡、出土遺物実測図 (1/80, 1/4)

形を呈すると考えられ、39・40号竪穴建物跡に切られる。東西軸約5.8m、南北軸約4.1m+α、床面までの深さは最大で約51cmを測る。主柱穴は調査区内では2本検出され、深さは約40～65cmを測るが、本来は4本柱と考えられる。また、焼土等も検出されなかつたため、カマドの有無は不明である。この遺構からは、須恵器壺蓋・土師器甕（第26図4・5）、鐵鎌（第37図1）が出土している。

なお上記のほか、39～41号竪穴建物跡として、須恵器壺・高壺（第26図6～8）のほか、石製紡錘車（第37図19）が出土している。



第26図 39～41号竪穴建物跡、出土遺物実測図(1/80、1/4)

42号竪穴建物跡（第27図、写真図版11）

調査区北東隅、39～41号竪穴建物跡の北東で検出された、平面不整方形を呈すると考えられる遺構で、西側を欠く。43号竪穴建物跡を切る。東西軸約2.4m+ α 、南北軸約3.4m、床面までの深さは最大で約16cmを測る。遺構内に複数のピットが見られるが、主柱穴は不明である。東壁南寄りに焼土が見られ、壁面より張り出して煙道を持つタイプのカマドが布設されていたと考えられるが、袖や袖石・袖石抜取痕等は確認されなかった。煙道は長さ約40cmを測る。この遺構からは、土師器甕（第27図1）が出土している。

43号竪穴建物跡（第27図、写真図版11）

調査区北東隅、39～41号竪穴建物跡の北東で検出された、平面不整方形を呈すると考えられる遺構で、西側を42号竪穴建物跡に切られる。東西軸約2.3m+ α 、南北軸約3.6m、床面までの深さは最大で約22cmを測る。遺構内に複数のピットが見られるが、主柱穴は不明である。東壁南寄りに壁面より若干張り出すタイプのカマドが布設されており、袖の現存長約60cm、袖幅は約40cmを測る。袖石や袖石抜取痕は確認されなかった。この遺構からは宝珠つまみが付くタイプの須恵器坏蓋が出土しているが、図示していない。

44号竪穴建物跡（第28図）

調査区北東隅、42・43号竪穴建物跡の東で検出された遺構であるが、焼土面は見られるものの、壁面が明確でなく、詳細は不明である。この遺構からは、土師器甕（第28図1）が出土している。

45号竪穴建物跡（第28図、写真図版11）

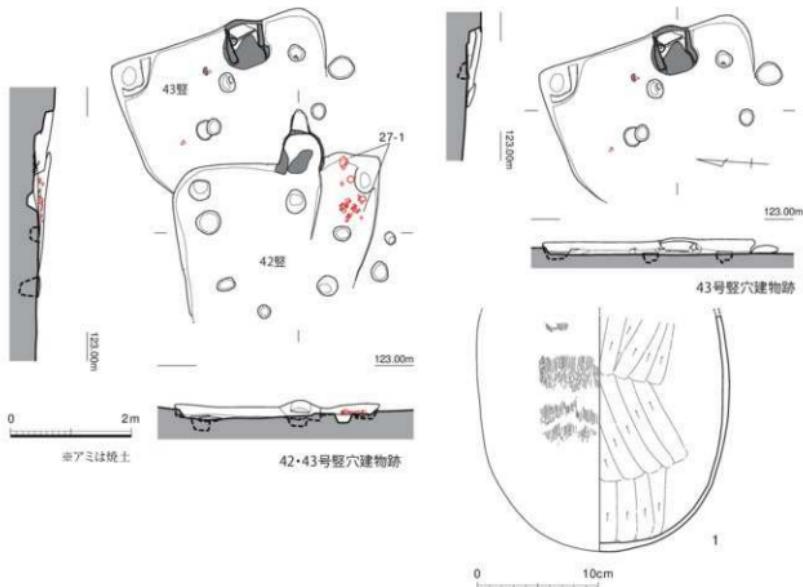
調査区北東隅、44号竪穴建物跡の北で検出された、平面方形または長方形を呈すると考えられる遺構で、西半を46・47号竪穴建物跡に切られる。東西軸約0.8m+ α 、南北軸約2.0m+ α 、床面までの深さは最大で約4cmを測る。主柱穴は検出できなかった。東壁に壁面より張り出すタイプのカマドが布設されているが、袖や袖石・袖石抜取痕等は確認されなかった。この遺構からは須恵器片（図示不能）のほか、土師器甕の高台部（第28図2）が出土している。

46号竪穴建物跡（第28図、写真図版11）

調査区北東隅、44号竪穴建物跡の北で検出された、平面方形または長方形を呈すると考えられる遺構で、45号竪穴建物跡を切り、西側の大部分を47号竪穴建物跡に切られる。東西軸約0.8m+ α 、南北軸約2.0m+ α 、床面までの深さは最大で約9cmを測る。遺構内に複数のピットが見られるものの、主柱穴は不明である。東壁の外側に焼土が見られ、壁面より張り出すタイプのカマドが存在した可能性がある。この遺構からは須恵器や土師器の破片が出土しているが、図示不能である。

47号竪穴建物跡（第28図、写真図版11）

調査区北東隅、44号竪穴建物跡の北で検出された、平面方形または長方形を呈すると考えられる遺構で、45・46号竪穴建物跡を切る。東西軸約1.0m+ α 、南北軸約3.6m+ α 、床面までの



第27図 42・43号竪穴建物跡、出土遺物実測図(1/80、1/4)

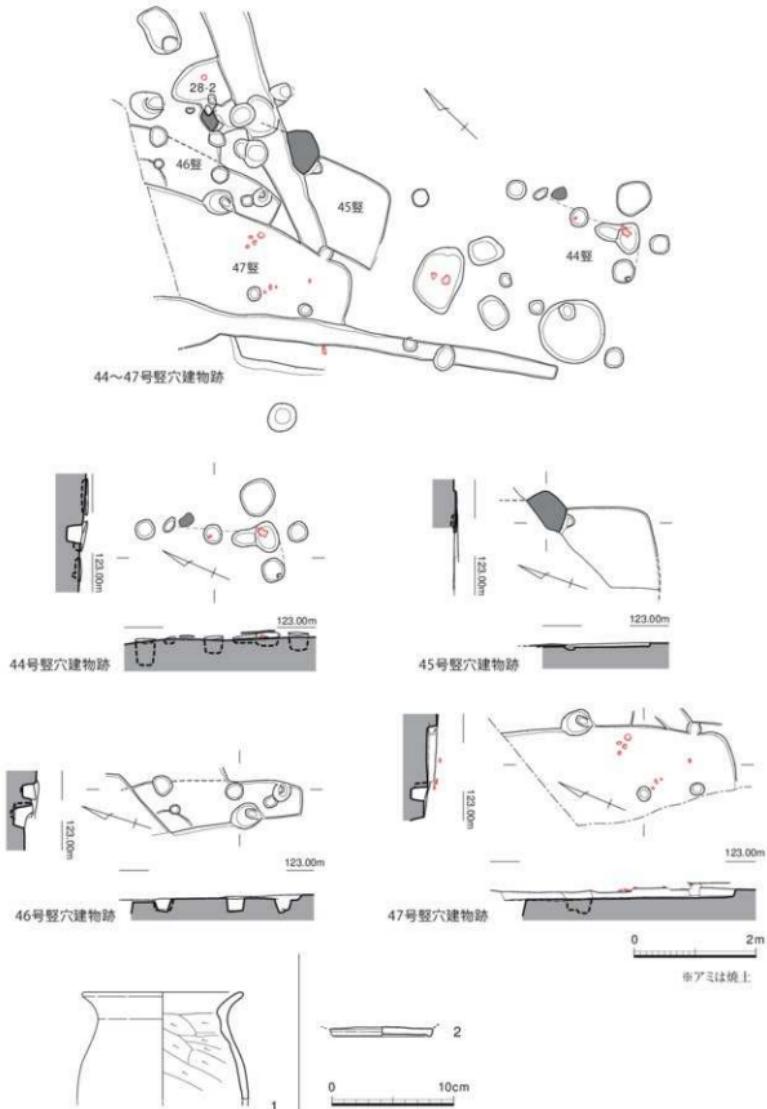
深さは最大で約12cmを測る。遺構内に複数のピットが見られるものの、主柱穴は不明である。調査区内ではカマドや焼土は見られないため、その有無は不明である。この遺構からは須恵器や土師器の破片が出土しているが、図示不能である。ほかに刀子(第37図7)が出土している。

2) 挖立柱建物跡

掘立柱建物跡は全部で7棟確認された。内訳は、2間×2間の総柱建物3棟、2間×2間の側柱建物1棟、3間×3間の側柱建物2間、3間×3+α間の側柱建物1棟である。1号を除き、構造や規模にはばらつきはあるものの、2・3、4・5、6・7号がそれぞれ隣り合うまたは近接して存在している。以下それぞれの建物ごとに説明を加える。

1号掘立柱建物跡(第29図、写真図版11)

調査区中央部西寄りで検出された建物跡で、今回の調査で検出されている遺構の中で最南端の遺構となる。近くに竪穴建物や土坑が存在せず、集落の端に単独で存在する。主軸方向をN-61°-Eにとり、柱間は2間×2間の総柱建物である。規模は柱穴間の心地距離で約3.0m×約3.4m、検出面での柱穴の掘り方直径は40~60cm、柱穴の深さは20~70cmを測る。柱痕跡は検出されなかつた。この遺構からは、遺物の出土はなかつた。



第28図 44～47号竪穴建物跡、出土遺物実測図 (1/80、1/4)

2号掘立柱建物跡（第29図）

調査区北西隅付近で検出された建物跡で、25号竪穴建物跡を切る。主軸方向をN-48°-Wにとり、柱間は2間×2間の総柱建物である。規模は柱穴間の心心距離で約2.7m×約3.6m、検出面での柱穴掘り方直径は40～70cm、柱穴の深さは40～70cmを測る。柱痕跡は検出されなかつた。この遺構からは遺物の出土はなかつた。

3号掘立柱建物跡（第29図、写真図版11）

調査区北西隅付近、2号掘立柱建物跡の東隣で検出された建物跡で、24号竪穴建物跡を切る。主軸方向をN-52°-Wにとり、柱間は2間×2間の側柱建物である。規模は柱穴間の心心距離で約2.3m×約2.6m、検出面での柱穴掘り方直径は30～60cm、柱穴の深さは40～75cmを測る。柱痕跡は検出されなかつた。この遺構からは遺物の出土はなかつた。

4号掘立柱建物跡（第30図、写真図版12）

調査区北東隅付近、34～38号竪穴建物跡の南で検出された建物跡である。主軸方向をN-16°-Wにとり、柱間は3間×3間の側柱建物である。規模は柱穴間の心心距離で約4.5m×約4.6m、検出面での柱穴掘り方直径は30～60cm、柱穴の深さは20～60cmを測る。柱痕跡は検出されなかつた。第30図P1の柱穴より須恵器壺の破片が出土しているが、図示不能である。

5号掘立柱建物跡（第30図、写真図版12）

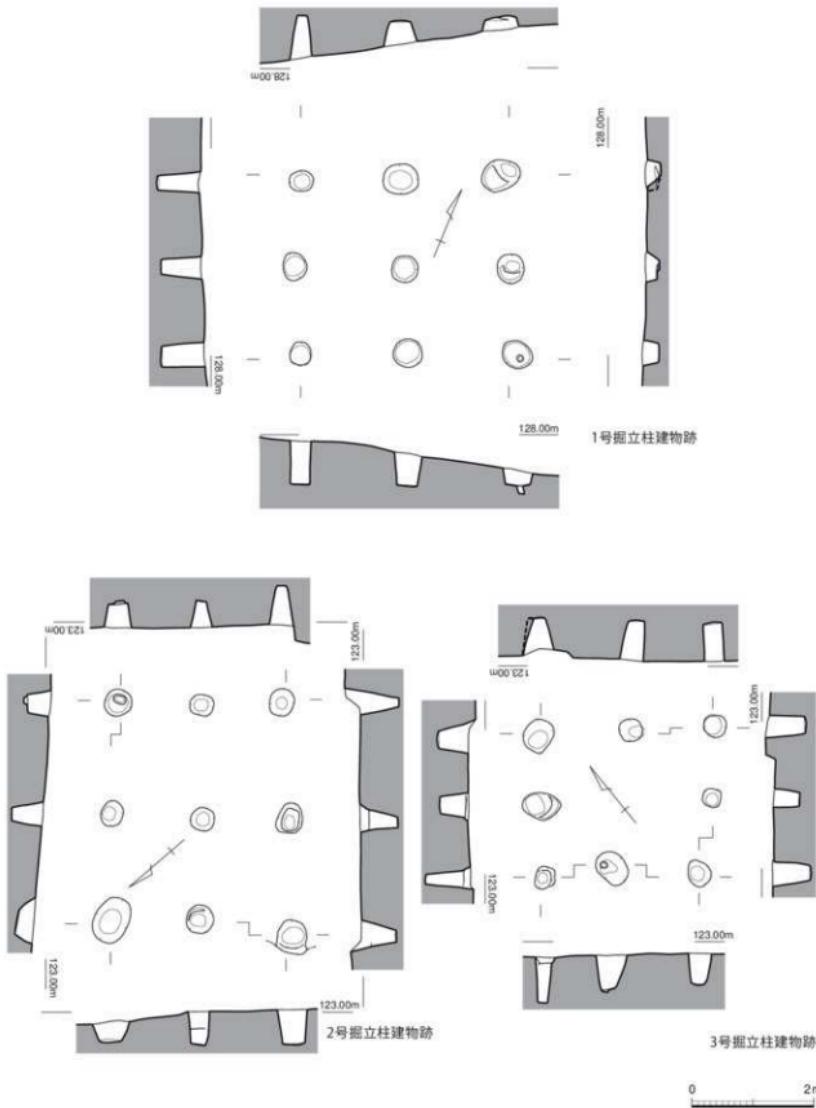
調査区北東隅付近、4号掘立柱建物跡の東隣で検出された建物跡である。主軸方向をN-27°-Wにとり、柱間は3間×3間の側柱建物である。規模は柱穴間の心心距離で約3.4m×約3.8m、検出面での柱穴掘り方直径は30～80cm、柱穴の深さは10～50cmを測る。柱痕跡は検出されなかつた。この遺構からは遺物の出土はなかつた。

6号掘立柱建物跡（第31図）

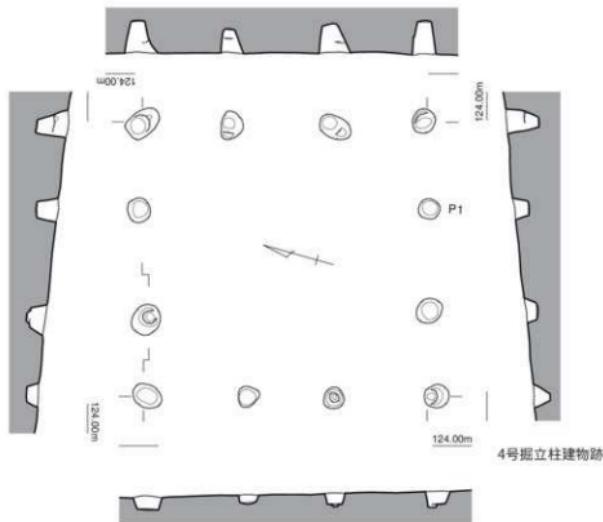
調査区北半、9号竪穴建物跡と重複して検出された建物跡で、9号竪穴建物跡を切る。主軸方向をN-30°-Wにとり、柱間は2間×2間の総柱建物である。規模は柱穴間の心心距離で約2.7m×約2.9m、検出面での柱穴掘り方直径は25～70cm、柱穴の深さは10～50cmを測る。柱痕跡は検出されなかつた。この遺構からは遺物の出土はなかつた。

7号掘立柱建物跡（第31図）

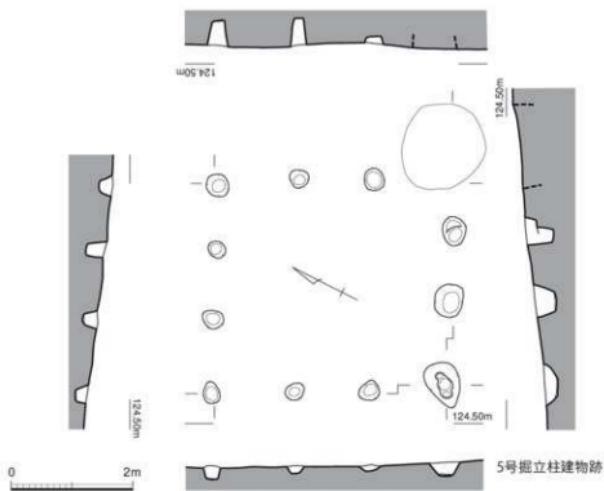
調査区北半、6号掘立柱建物跡の北で検出された建物跡である。主軸方向をN-14°-Wにとり、柱間は3間×3間+αで北側に1間の庇がつく側柱建物である。庇を含む規模は、柱穴間の心心距離で約4.4m×約5.6m+α、検出面での柱穴掘り方直径は30～60cm、柱穴の深さは15～60cmを測る。柱痕跡は検出されなかつた。第31図P1より土師器片が出土しているが、図示不能である。またP2より石製紡錘車（第37図20）が出土している。



第29図 1～3号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

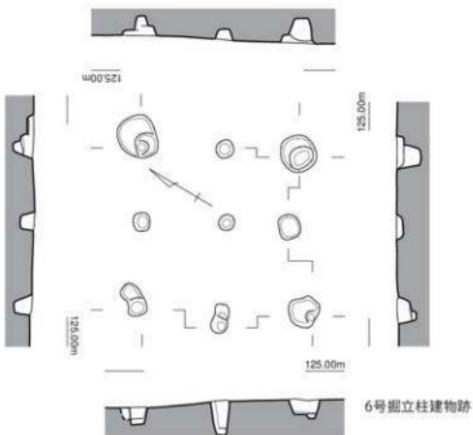


4号掘立柱建物跡

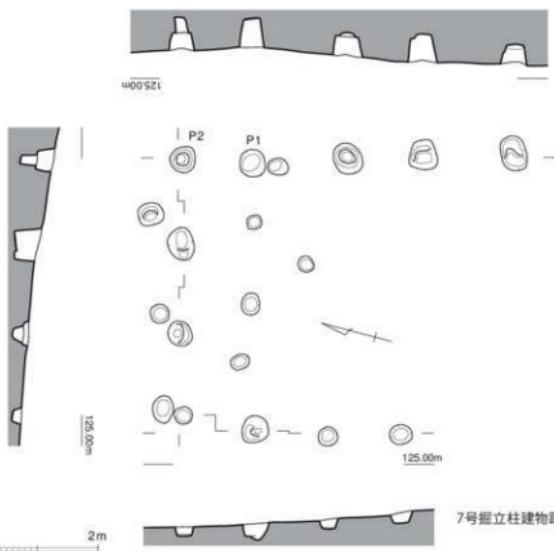


5号掘立柱建物跡

第30圖 4・5号掘立柱建物跡実測図 (1/80)



6号掘立柱建物跡



7号掘立柱建物跡

第31図 6・7号掘立柱建物跡実測図(1/80)

3) 井戸

井戸は2基確認された。いずれも調査区北半、集落の中に存在する。

1号井戸（第32図）

調査区北半中央部、5号堅穴建物跡の西で検出された遺構である。検出面での平面プランは約2.4m×約2.1mの梢円形を呈し、深さは210cmを測る。断面はほぼ筒状を呈するが、検出面よりも底面のほうが若干広くなっている。この遺構からは遺物の出土はなかった。

2号井戸（第32図）

調査区北半中央部、1号堅穴建物跡の東で検出された遺構で、5号堅穴建物跡を切る。検出面での平面プランは約2.1m×約1.8mの不整梢円形を呈し、深さは200cmを測る。底面に向かって若干すぼまる。この遺構からは土師器高环の破片が出土しているが、図示不能である。

4) 土坑

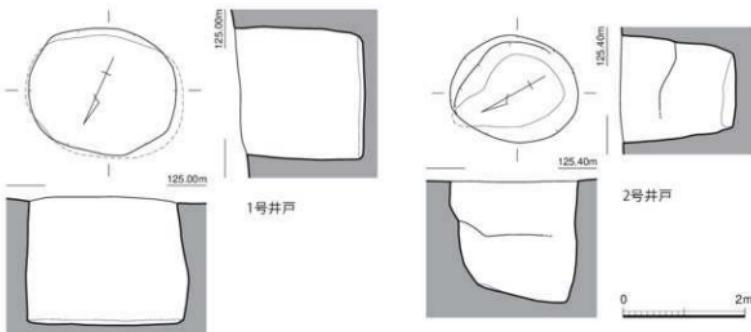
土坑は全部で20基検出された。調査区中央から南側の斜面の高い部分には見られず、北半の集落の中に点在する。以下説明を加える。

1号土坑（第33図、写真図版12）

調査区中央部東端、1号掘立柱建物跡の北で検出された土坑で、平面長方形を呈する。検出面での規模は、長軸約1.8m、短軸約1.2m、底面までの深さは約20cmを測る。この遺構からは土師器の破片が出土しているが、図示不能である。

2号土坑（第34図、写真図版12）

調査区中央部、1号掘立柱建物跡の南東で検出された土坑で、ピットを除くA地点の遺構の中では最も高い位置にある。平面円形を呈する。検出面での規模は、長軸約1.4m、短軸約1.3m、底面までの深さは約150cmを測り、そこからさらに底面中央部はピット状に約100cm深くなる。この遺構からは遺物の出土はなかった。



第32図 1・2号井戸実測図 (1/80)

3号土坑（第34図）

調査区北半、11・12号竪穴建物跡と7号掘立柱建物跡の間で検出された土坑で、平面不整円形を呈する。検出面での規模は、長軸約2.3m、短軸約2.2m、底面までの深さは約280cmを測る。この遺構からは遺物の出土はなかった。

4号土坑（第33図）

調査区北半、13号竪穴建物跡の西で検出された土坑である。平面は細長い形状を呈し、一方の端部はピット状の掘り込みがある。検出面での規模は、長軸約2.5m、短軸約0.5m、底面までの深さは約10cm、ピット状部分の深さは約15cmを測る。この遺構からは遺物の出土はなかった。

5号土坑（第34図、写真図版12）

調査区北西隅、27号竪穴建物跡の東で検出された土坑で、27号竪穴建物跡は東側を欠いているため、本来は27号竪穴建物跡との切り合い関係があったはずであるが、詳細は不明である。17号土坑を切る。平面橢円形を呈する。検出面での規模は、長軸約1.6m、短軸約1.1m、底面までの深さは約180cmを測る。検出面よりも底面の方がわずかに広くなっている。この遺構からは遺物の出土はなかった。

6号土坑（第33図、写真図版12）

調査区北半、42・43号竪穴建物跡の南で検出された土坑で、平面不整形を呈し、西側を欠く。検出面での規模は、長軸約1.9m、短軸約1.0m+ α 、底面までの深さは約10cmを測る。 k の遺構からは土師器片や陶器片、高台付きの須恵器片などが出土しているが、図示不能である。

7号土坑（第33図、写真図版12）

調査区中央部、3号竪穴建物跡と6号竪穴建物跡の間で検出された土坑で、平面不整形を呈する。検出面での規模は、長軸約0.9m、短軸約0.8m、底面までの深さ約15cmを測る。土坑内部には炭・焼土が見られる。この遺構からは土師器片が出土しているが、図示不能である。

8号土坑（第34図）

調査区中央部東端で検出された土坑で、4号竪穴建物跡を切る。平面橢円形を呈する。検出面での規模は、長軸約1.9m、短軸約1.5m、底面までの深さは約200cmを測り、底面東側はさらに約120cm深くなる。この遺構からは遺物の出土はなかった。

9号土坑（第34図）

調査区中央部西端、7号竪穴建物跡の西で検出された土坑である。平面円形を呈するが、地中で広がり、底面は長橢円形を呈する。検出面での規模は、長軸約1.0m、短軸約0.9m、底面までの深さ約160cmを測る。底面の規模は長軸約2.0m、短軸約1.1mである。この遺構からは遺物の出土はなかった。

10号土坑（第33図、写真図版12）

調査区北半東寄りで検出された土坑で、8号竪穴建物跡を切る。平面長方形を呈する。検出面での規模は、長軸約1.8m、短軸約1.0m、底面までの深さは約40cmを測る。内部では浮いた状態で焼土が検出された。この遺構からは、須恵器や土師器の破片のほか、須恵器壺蓋（第36図1）が出土している。

11号土坑（第33図、写真図版12）

調査区北半、10号竪穴建物跡と重複して検出された土坑で、10号竪穴建物跡を切る。平面楕円形を呈する。検出面での規模は、長軸約0.6m、短軸約0.5m、底面までの深さ約15cmを測る。検出面では礫が多く出ており、その礫の下には炭が見られる。この遺構からは遺物の出土はなかった。

12号土坑（第34図）

調査区北半、16・17号竪穴建物跡の西で検出された土坑で、平面楕円形を呈する。検出面での規模は、長軸約1.8m、短軸約1.5m、底面までの深さ約220cmを測る。この遺構からは遺物の出土はなかった。

13号土坑（第35図）

調査区北半、16号竪穴建物跡の北西で検出された土坑で、5号掘立柱建物跡を切る。平面楕円形を呈し、検出面での規模は、長軸約1.6m、短軸約1.3m、底面までの深さ約210cmを測る。検出面よりも底面の方がわずかに広がっている。この遺構からは遺物の出土はなかった。

14号土坑（第35図）

調査区北半、5号掘立柱建物跡と38号竪穴建物跡の間で検出された土坑で、平面不整形を呈する。検出面での規模は、長軸約3.0m、短軸約1.9m、底面までの深さ約30cmを測る。底面中央部にはピット状の堀込みがあり、この深さは約50cmである。この遺構からは、須恵器壺蓋や土師器瓶（第36図2・3）が出土している。

15号土坑（第35図）

調査区北半、19号竪穴建物跡の北で検出された土坑で、22-2および23号竪穴建物跡を切る。平面不整楕円形を呈する。検出面での規模は、長軸約3.4m、短軸約2.2m、底面までの深さ約150cmを測る。この遺構からは遺物の出土はなかった。

16号土坑（第36図）

調査区北半、14号竪穴建物跡の主柱穴のひとつと重複して検出された土坑で、14号竪穴建物跡を切る。平面不整円形を呈する。検出面での規模は、直径約0.9m、底面までの深さ約160cmを測る。この遺構からは遺物の出土はなかった。

17号土坑（第35図、写真図版12）

調査区北西隅で検出された土坑で、5号土坑と重複し切られる。平面不整方形を呈し、検出面での規模は長軸約3.2m、短軸約3.0m、底面までの深さ約40cmを測り、遺構内のピットの深いものは深さ約70cmである。この遺構からは須恵器や土師器の破片が出土しているが、図示不能である。

18号土坑（第33図）

調査区北半、9号竪穴建物跡・6号掘立柱建物跡と10号竪穴建物跡の間で検出された土坑で、9号竪穴建物跡との切り合い関係は不明であるが、6号掘立柱建物跡に切られる。平面長方形を呈し、検出面での規模は、長軸約1.9m、短軸約0.8m、底面までの深さ約20cmを測り、北西隅のピット状の掘り込みは深さ約50cmである。この遺構からは土師器片（図示不能）が出土している。

19号土坑（第35図）

調査区北半、17号竪穴建物跡と重複して検出された土坑で、17号竪穴建物跡を切る。平面円形を呈し、検出面での規模は直径約1.2m、底面までの深さ約170cmを測る。検出面から底面まではほとんど形状が変わらず、断面は筒状を呈する。この遺構からは遺物の出土はなかった。

20号土坑（第35図）

調査区北半、16号竪穴建物跡と重複して検出された土坑で、16号竪穴建物跡を切る。平面は複数のピットが重なった形状を呈する。検出面での規模は、長軸約2.0m、短軸約1.4m、深さは最深で約50cmを測る。この遺構からは遺物の出土はなかった。

5) 溝（第5図）

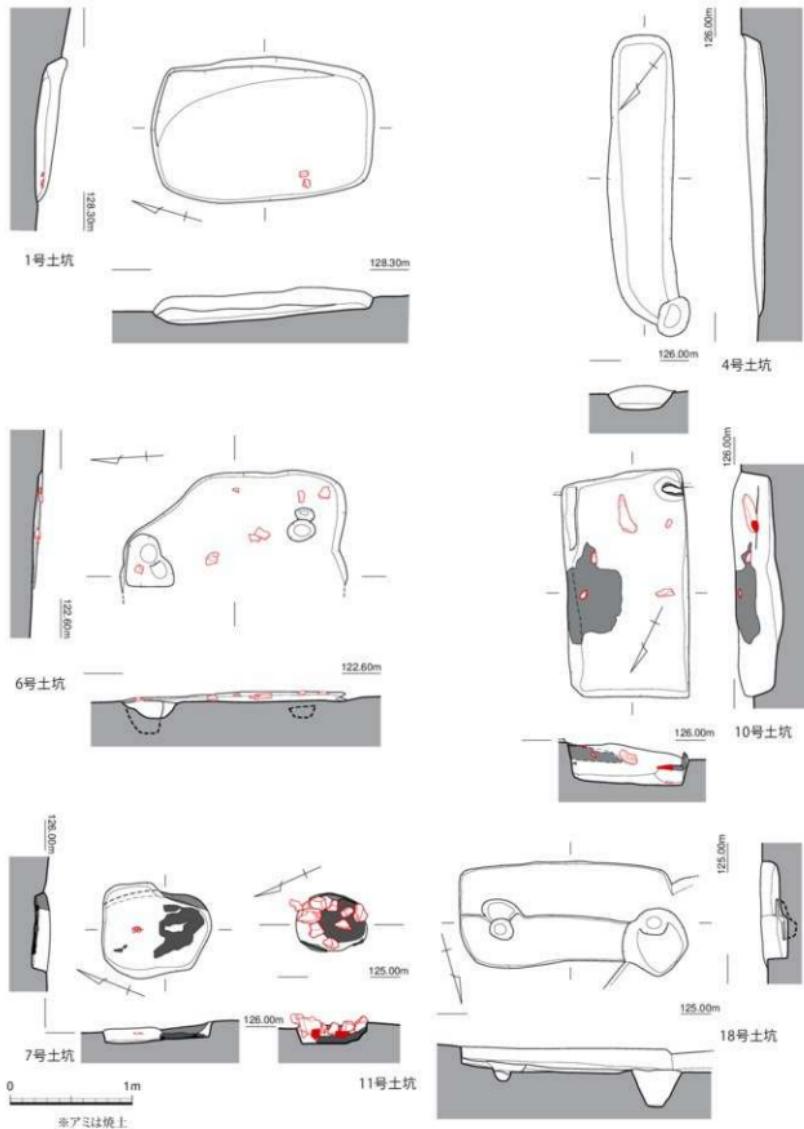
調査区内では、従前の畠の段以外に溝状の遺構が複数検出されているが、遺構としては下記の3条の溝が認められた。ただし、遺構全体図には図示したものの、個別遺構図を作成していないかったため、溝の深さや埋土の状況などは不明であることをお詫びする。

1号溝

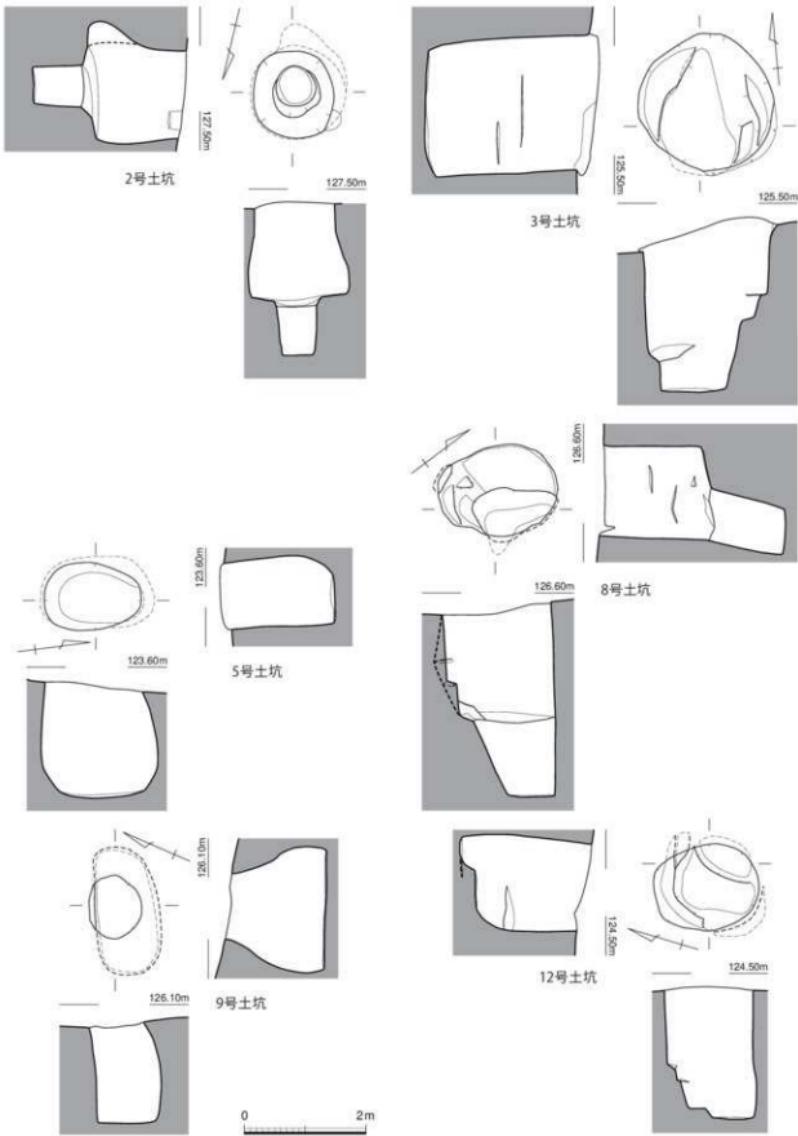
調査区北西隅、39～41号竪穴建物跡と5・17号土坑の間で検出された溝で、南北方向、すなわち谷の傾斜に沿った方向に伸びる。北側は調査区外へ続き、調査区内で検出された規模は、長さ約4.6m、幅約25cmである。この溝からは遺物の出土はなかった。

2号溝

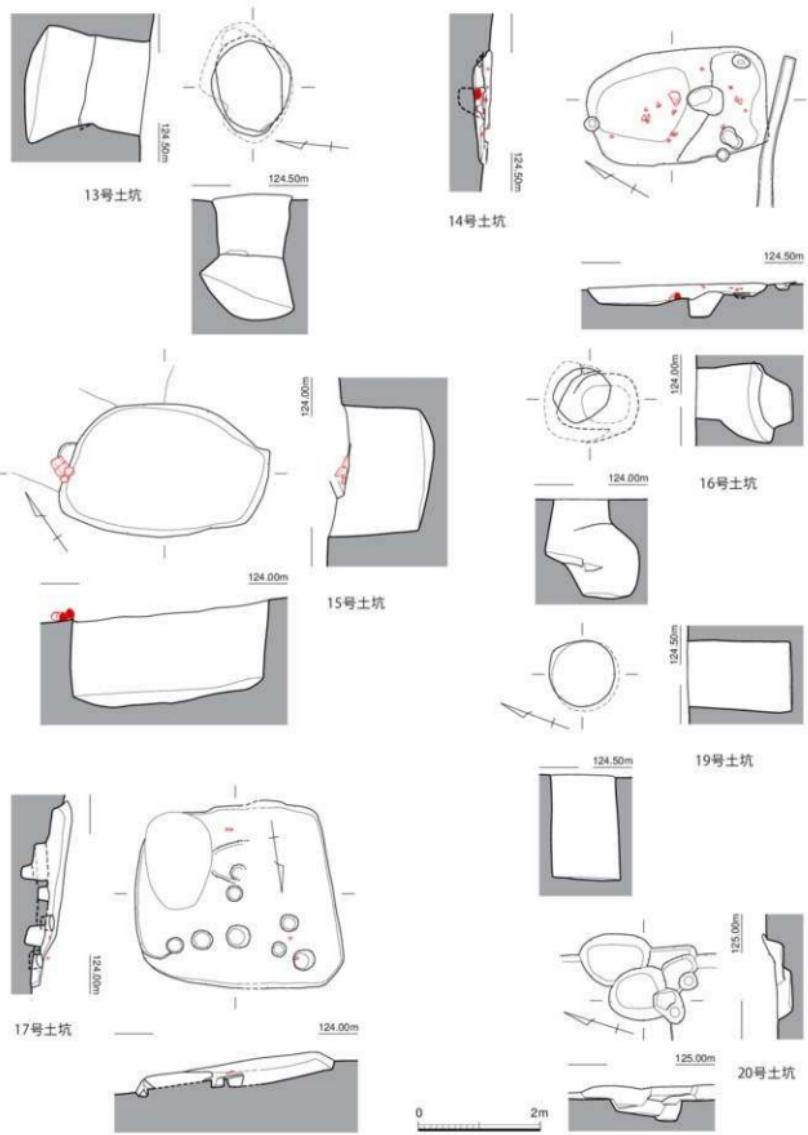
調査区北東隅で検出された溝である。1号溝同様、谷の傾斜に沿った方向に3つに途切れながら伸びているが、本来は一連のものであったと考えられる。北側は調査区外へ続き、調査区内で検出された規模は、長さ約27m、幅約20cmである。34・36・47号竪穴建物跡を切り、32・33号竪穴建物跡に切られる。4号掘立柱建物跡・43・44号竪穴建物跡との切り合い関係は不明である。この溝からは遺物の出土はなかった。



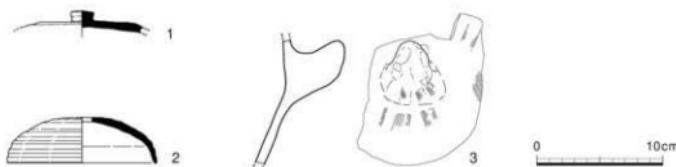
第33図 土坑実測図① (1/40)



第34図 土坑実測図(2) (1/80)



第35图 土坑实测图③ (1/80)



第36図 土坑出土遺物実測図(1/4)

3号溝

調査区中央部東寄りで検出された溝である。1・2号溝と異なり、谷の傾斜とは関係なく、平面形は弧を描く。検出された規模は、長さ約10.1m、幅約35cmを測り、弧の一方は13号竪穴遺構に切られる。この溝からは須恵器や土師器の破片が出土しているが、国示不能である。

6) その他の遺物（第37・38図、写真図版18）

前節までに記述してきた土器・鉄製品・鉄生産関連遺物・石製品のほかに、各遺構や包含層などから石製品・石器が出土している。各遺物の詳細については第3・4表にまとめている。

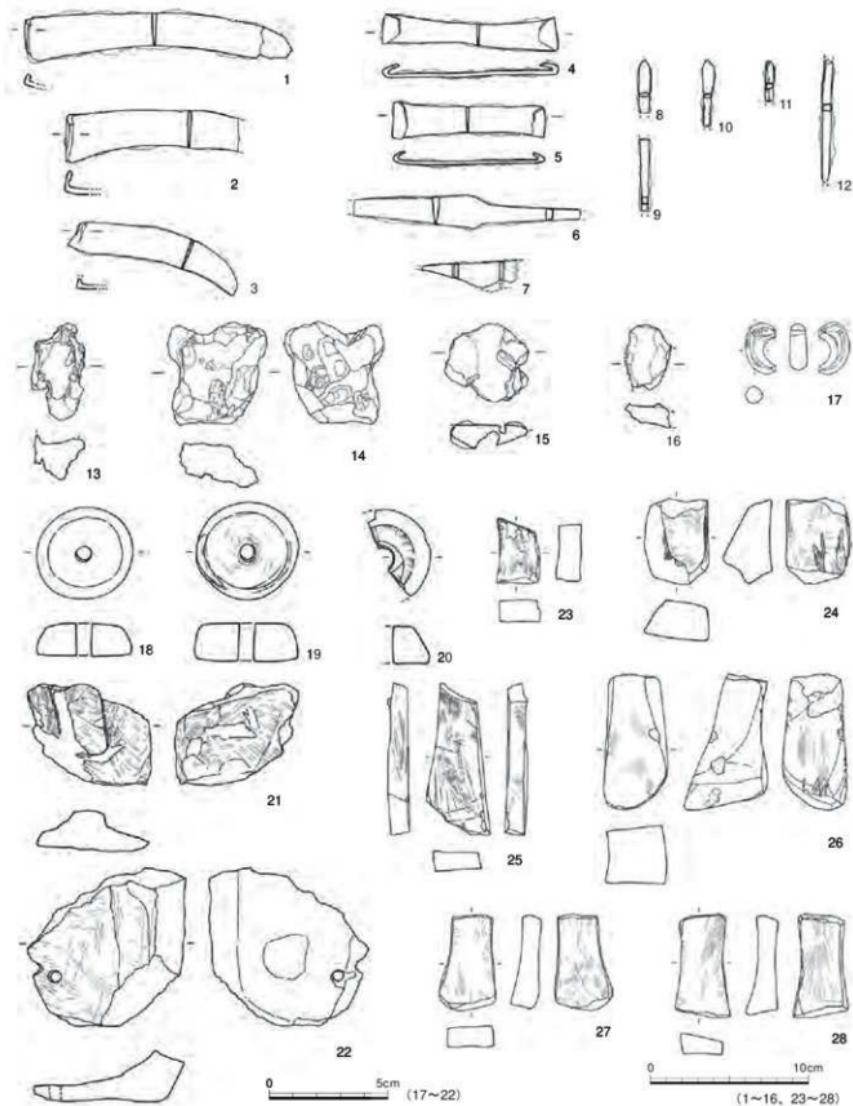
(3) 小結

長迫遺跡A地点の調査結果について、簡単にまとめる。

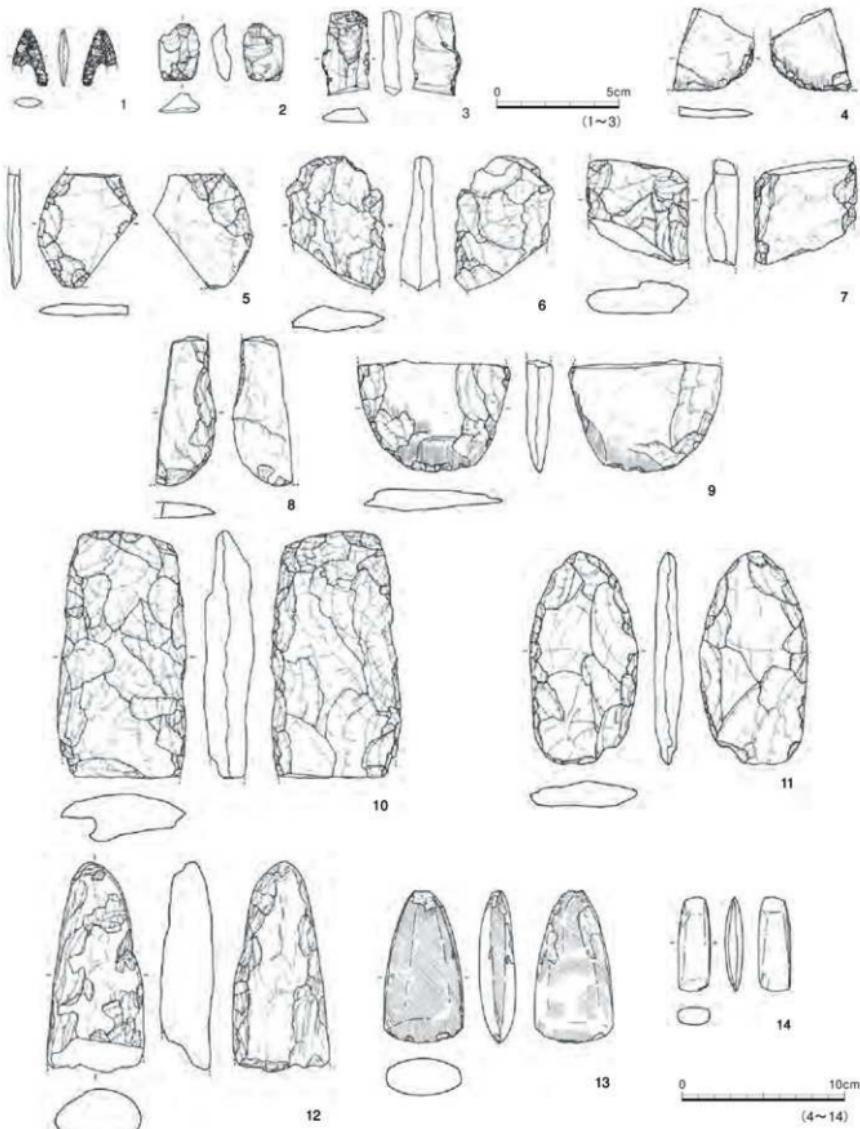
竪穴建物跡は全部で47軒が確認された。これらはその出土遺物から、主に古墳時代後期(1～15・18・19・22～31・37～41・44・45号)・奈良時代(20・21・32～37・42・43・46・47号)・平安時代(16・17号)の3時期のものが見られる。

大多数を占める古墳時代後期の竪穴建物跡は、一辺約10mを測る大型のもの(5号)を中心として、そのまわりに一辺5～6mの中型、一辺3～4mの小型のものが配置されており、この時期の集落内の建物配置を考えるうえで興味深い。これら竪穴建物跡や掘立柱建物跡その他の遺構群は、調査区の北半分すなわち谷の入口に近い部分に集中してつくられている。対して谷奥の標高が高い部分では多数の小ピット以外には遺構が認められず、居住区域とそれ以外の区域(例えば畠地利用など)、土地の用途が明確に区別されていた可能性が考えられる点が特徴的である。また古墳時代後期および平安時代の一部の竪穴建物から鉄生産にかかわるといわれる鉄滓が出土している点も、この遺跡の特徴といえよう。

なお、各遺構の時期や性格等については、B地点の調査結果と合わせて検討することとしたい。



第37図 鉄製品・鉄生産関連遺物・石製品・石器実測図(1/2、1/3)



第38図 石器実測図 (1/2, 1/3)

第2表 土器観察表①

回収番号	遺物名	種別	基盤	土色	土器		色調	表面	内部	胎土	形状		
					石器	陶器							
6-1	1 瓢	土器類	窯坏	(120)	-	-	(50)	墨透けのため不明	墨透けのため不明	BD	身	泥赤褐色 表面褐色	
6-2	2 瓢	泥質壺	坪	(115)	-	-	(33)	墨透けハケクズリ	墨透けナ・ナ子	BF	身	泥赤褐色 表面褐色	
6-3	2 瓢-1・2	土器類	鏡	(210)	-	-	(41)	墨透けのため不明	ケズリ	ABC	身	暗赤褐色 表面褐色	
6-4	2 瓢	土器類	瓶	-	-	-	(73)	墨透けのため不明	ケズリ	ABC	身	泥赤褐色 表面褐色	
7-1	3 瓢-1	泥質壺	坪	(108)	-	-	(43)	墨透けハケクズリ	墨透けナ・ナ子	BF	身	泥赤褐色 表面褐色	
7-2	3 瓢-17	泥質壺	鋸鋸	(122)	-	-	(44)	墨透けナ	墨透けナ	BE	身	泥赤褐色 表面褐色	
7-3	3 瓢-9	泥質壺	鋸鋸	-	-	-	(65)	カタ目	ナ子	BE	身	泥赤褐色 表面褐色	
7-4	3 瓢-19	土器類	窯坏	(107)	-	-	(45)	墨透けのため不明	墨透けのため不明	BD	身	泥赤褐色 表面褐色	
7-5	3 瓢-21	土器類	鏡	(145)	-	-	(44)	墨透けのため不明	ケズリ	ABC	身	泥赤褐色 表面褐色	
7-6	3 瓢-24(?)・3 瓢-32	土器類	鏡	(178)	-	-	(55)	ナ子?	ケズリ	ACE	身	にじ(黄褐色) にじ(黄褐色) 反転深灰	
7-7	3 瓢-6	土器類	鏡	(214)	-	-	(34)	墨透けのため不明	ケズリ	ABCD	身	泥赤褐色 表面褐色	
9-1	5 瓢-16	泥質壺	坪	(117)	-	-	(36)	墨透けハケクズリ	墨透けナ	BE	身	泥青灰色 表面灰色	
9-2	5 瓢-5	泥質壺	坪	-	-	-	(19)	墨透けのため不明	墨透けナ	BE	身	泥赤褐色 表面褐色	
9-3	5 瓢	泥質壺	坪	-	-	-	(12)	墨透けナ	墨透けナ	BE	身	泥赤褐色 表面褐色	
9-4	5 瓢-19	泥質壺	鏡	(220)	-	-	(58)	墨透けナ・タタキ	墨透けナ・丁度	BE	身	泥赤褐色 表面褐色	
9-5	5 瓢-12	土器類	坪	(130)	-	-	(42)	墨透けのため不明	墨透けのため不明	B	身	泥赤褐色 表面褐色	
9-6	5 瓢-6	土器類	坪	(100)	-	-	(36)	墨透けのため不明	墨透けのため不明	BD	身	泥赤褐色 表面褐色	
9-7	5 瓢-15	土器類	窯坏	-	-	-	(16)	(54)	ケズリ	BD	身	泥赤褐色 表面褐色	
9-8	5 瓢-3	土器類	鏡	(210)	-	-	(58)	墨透けのため不明	ケズリ	ABCD	身	泥赤褐色 表面褐色	
9-9	5 瓢-8・9	土器類	鏡	(178)	-	-	(82)	ハサツ	ケズリ	ABCD	身	泥赤褐色 表面褐色	
9-10	5 瓢-25、ピット内	土器類	鏡	-	-	-	(57)	墨透けのため不明	ケズリ	ABC	身	泥赤褐色 表面褐色	
9-11	5 瓢-20	土器類	鏡	-	-	-	(97)	墨透けのため不明	ケズリ	ABC	身	泥赤褐色 表面褐色	
9-12	5 瓢-17	土器類	鏡	-	-	-	(100)	ナ子?	ケズリ	ABCE	身	泥赤褐色 表面褐色	
9-13	5 瓢-21・カワド	泥質壺	鏡	(276)	-	-	(54)	ナ子	ケズリ	ABC	身	泥赤褐色 表面褐色	
9-14	5 瓢-4	土器類	鏡	-	-	-	(89)	ヨリナ・ナ・ヨリナナ	ケズリ	ACE	身	にじ(黄褐色) にじ(黄褐色) 脂手形のみ	
10-1	6 瓢	泥質壺	坪	(880)	-	-	(37)	墨透けハケクズリ	墨透けナ・ナ子	BF	身	泥赤褐色 表面褐色	
10-2	6 瓢-13	土器類	鏡	-	-	-	(128)	ハサツ	ケズリ	ABCD	身	泥赤褐色 表面褐色	
10-3	6 瓢-22・カワド	土器類	鏡	(141)	-	-	(37)	墨透けのため不明	ケズリ	ABCD	身	泥赤褐色 表面褐色	
10-5	6 瓢-22・カマド	土器類	鏡	(124)	358	-	(321)	墨透けのため不明	ケズリ	ABCD	身	泥赤褐色 表面褐色	
10-6	6 瓢-2・6・14・18・19・19	土器類	鏡	(178)	250	-	(34)	墨透けのため不明	ケズリ	ABCD	身	泥赤褐色 表面褐色	
11-1	7 瓢-2	泥質壺	坪	(108)	-	-	(33)	墨透けハケクズリ	墨透けナ・ナ子	BE	身	泥赤褐色 表面白色	
11-2	7 瓢	土器類	窯坏	-	-	-	(46)	ケズリ	墨透けのため不明	BD	身	泥赤褐色 表面褐色	
11-3	7 瓢-4	土器類	鏡	-	-	-	(95)	墨透けのため不明	ケズリ	ABCD	身	泥赤褐色 表面褐色	
11-4	8 瓢-9	泥質壺	坪	-	-	-	(88)	(14)	墨透けナ	墨透けナ・ナ子	BF	身	泥赤褐色 表面灰色
11-5	8 瓢-4	泥質壺	坪	-	-	-	(98)	(21)	墨透けナ	墨透けナ・ナ子	BF	身	泥赤褐色 表面灰色
11-6	8 瓢-6・P.1 内	土器類	田	-	-	-	(28)	墨透けのため不明	墨透けのため不明	BD	身	泥赤褐色 表面褐色	
11-7	8 瓢	土器類	坪	-	-	-	(10)	(14)	墨透けのため不明	墨透けのため不明	ABCD	身	泥赤褐色 表面褐色
11-8	8 瓢-2	土器類	鏡	(134)	-	-	(33)	墨透けのため不明	ケズリ	ABCD	身	泥赤褐色 表面褐色	
11-9	8 瓢-6	土器類	鏡	(154)	-	-	(48)	墨透けのため不明	ケズリ	ABC	身	泥赤褐色 表面褐色	
11-10	8 瓢-9	白磁	鏡	(130)	-	-	(28)	-	-	-	身	白赤褐色 表面褐色	
11-11	8 瓢-4	白磁	鏡	(164)	-	-	(26)	-	-	-	身	白赤褐色 表面褐色	
12-1	9 瓢-12	泥質壺	坪	(105)	-	-	(40)	墨透けハケクズリ	墨透けナ・ナ子	BE	身	泥赤褐色 表面灰色	
12-2	9 瓢	泥質壺	鏡	(182)	-	-	(33)	ナ子	ナ子	BE	身	青紫褐色 表面褐色	
12-3	9 瓢-7	土器類	鏡	-	-	-	(76)	墨透けのため不明	ケズリ	ABCD	身	泥赤褐色 表面褐色	
13-1	10 瓢-1	泥質壺	窯坏	(120)	-	-	(40)	墨透けハケクズリ	墨透けナ・ナ子	BE	身	泥赤褐色 表面褐色	
13-2	10 瓢-22	泥質壺	坪	(116)	-	-	(38)	墨透けハケクズリ	墨透けナ・ナ子	BH	身	泥青灰色 表面灰色	
13-3	10 瓢	泥質壺	坪	(120)	-	-	(24)	墨透けナ	墨透けナ・ナ子	BE	身	泥青灰色 表面灰色	
13-4	10 瓢	泥質壺	坪	(108)	-	-	(27)	墨透けナ	墨透けナ・ナ子	BF	身	泥赤褐色 表面褐色	
13-5	10 瓢	土器類	坪	(106)	-	-	(31)	墨透けのため不明	墨透けのため不明	BD	身	泥赤褐色 表面褐色	
13-6	10 瓢	土器類	坪	(108)	-	-	(37)	墨透けのため不明	墨透けのため不明	B	身	泥赤褐色 表面褐色	
13-7	10 瓢-11	土器類	窯坏	-	-	-	(42)	ケズリ	BD	身	泥赤褐色 表面褐色		
13-8	10 瓢-6	土器類	鏡	(137)	-	-	(73)	墨透けのため不明	ケズリ	ABCD	身	泥赤褐色 表面褐色	
13-9	10 瓢-3、19	土器類	鏡	(207)	-	-	(155)	墨透けのため不明	ケズリ	ABC	身	泥赤褐色 表面褐色	
13-10	10 瓢-17	土器類	鏡	(210)	-	-	(100)	墨透けのため不明	ケズリ	ABC	身	泥赤褐色 表面褐色	
14-1	11 瓢-1	土器類	鏡	-	257	-	(240)	墨透けのため不明	ケズリ	ABC	身	泥赤褐色 表面褐色	
15-1	14 瓢-2・カワド	泥質壺	窯坏	(122)	-	-	(39)	墨透けハケクズリ	墨透けナ・ナ子	BF	身	泥青灰色 表面灰色	
15-2	14 瓢-14	泥質壺	窯竹口	-	139	-	(75)	ヘラクズリ	墨透けナ	BE	身	暗赤褐色 表面褐色	
15-3	14 瓢-16	土器類	坪	118	-	-	(39)	墨透けのため不明	墨透けのため不明	BD	身	泥赤褐色 表面褐色	
15-4	15 瓢-2	泥質壺	坪	102	-	-	(32)	墨透けハケクズリ	墨透けナ・ナ子	BE	身	青紫褐色 表面灰色	
15-5	15 瓢-3	土器類	鏡	(208)	-	-	(125)	ハナメ、徹ナ子	ケズリ	BCDE	身	泥赤褐色 表面褐色	

胎土-A:角閃石 B:石英 C:赤色粒子 D:赤色粒子 E:白色粒子 F:黑色粒子 G:雲母 H:鈣長

第3表 土器觀察表(2)

回数番号	通称名	種別	原種	（日本国外）原種の分布				原産地	原種	原産地	備考			
				日本	周囲島嶼	世界	本州							
16-1	17蟹	白蟹	小田	-	44	25	-	-	貝	黄白色	灰白色	日本、マダガスカル、アフリカ、南米、オセアニアに分布する。		
16-2	17蟹	白蟹	横	(180)	-	(53)	-	-	貝	灰白色	灰白色			
16-3	17蟹 P.16	青蟹	小田	-	-	19	-	-	貝	深海性	深海性	日本国外では地殻底棲とし、日本では底生。		
16-4	17蟹 P.16 アカツブ、ヒラツブ	黒蟹	小田	-	-	(210)	ヨコズナ・カニ	日本ヨコズナ	エ	貝	深海性	深海性	日本国外では地殻底棲とし、日本では底生。	
17-1	19蟹±5足、25蟹	紫蟹	舟	-	(104)	(56)	ヨコズナ・カニ	日本ヨコズナ	エ	貝	暗褐色	暗褐色		
17-2	19蟹	紫蟹	横	(232)	-	(78)	ヨコズナ・タカシ	ヨコズナ	エ	貝	灰白色	灰白色	反転後足	
17-3	19蟹±4-16-17	土野蟹	豊	(212)	-	(87)	ナメ	日本ナメ	ABCE	貝	濃青色	濃青色	反転後足	
17-4	19蟹	土野蟹	豊	176	-	(49)	-	-	貝	黄白色	灰白色			
19-1	20蟹-2	青蟹	横	-	-	19	ヨコズナヘカズリ	日本ナメ・ナメ	EE	貝	暗青色	暗青色		
19-2	20蟹-3	青蟹	横	(176)	-	(142)	ヨコズナヘカズリ	日本ナメ・ナメ	EE	貝	暗青色	暗青色		
19-3	22蟹±1-7	土野蟹	坪	(106)	-	50	ヨコズナヘカズリ	厚壳のため不明	AB	貝	深灰色	深灰色	生境消滅または土野蟹	
19-2	22蟹-1-14	土野蟹	坪	104	-	49	厚壳のため不明	厚壳のため不明	SD	貝	深海性	深海性		
20-1	24蟹	土野蟹	坪	(116)	-	(47)	厚壳のため不明	厚壳のため不明	ACD	貝	灰褐色	灰褐色	反転後足	
20-2	24蟹-4	土野蟹	豊	(147)	-	(96)	ナメ	ヨコズナ・AIACE	AIACE	貝	灰褐色	灰褐色	被食痕あり、反転後足	
20-3	24蟹±カド子	土野蟹	豊	(200)	(232)	(205)	ハケメ	ヨコズナ	ABCD	貝	深海性	深海性		
20-4	25蟹-4	土野蟹	豊	(137)	-	(50)	厚壳のため不明	厚壳のため不明	AC	貝	灰褐色	灰褐色	反転後足	
20-5	25蟹-10	土野蟹	豊	-	-	(48)	ナメ	ヨコズナ	A	貝	地色	地色	一部反転後足	
20-6	25蟹-1-D5足	土野蟹	豊	(147)	(150)	-	84	厚壳のため不明	厚壳のため不明	SD	貝	灰褐色	灰褐色	一部反転後足
20-7	25蟹-12-14	土野蟹	豊	-	-	(76)	厚壳のため不明	ナメ	ヨコズナ	ABCD	貝	暗褐色	暗褐色	
20-8	25蟹-15、越前 (C-5足)	土野蟹	豊	(190)	-	(65)	ナメ	ヨコズナ	AIACE	貝	灰褐色	灰褐色	反転後足	
20-9	25蟹-16-21	土野蟹	豊	(128)	-	(44)	ヨコズナ	ヨコズナ	ABCE	貝	灰褐色	灰褐色	反転後足	
21-1	26蟹-3	土野蟹	坪	110	-	42	厚壳のため不明	厚壳のため不明	S	貝	深灰色	深灰色	地色	
21-2	26蟹-8	土野蟹	豊	-	-	(75)	厚壳のため不明	厚壳のため不明	AB	貝	深灰色	深灰色	地色	
21-3	26蟹-9	土野蟹	豊	-	-	(153)	ナメ	ヨコズナ	ACE	貝	灰褐色	灰褐色	地色	
21-4	27蟹-1-2	河豚蟹	豊	122	-	38	ヨコズナヘカズリ	日本ナメ・ナメ	EE	貝	青灰色	青灰色		
21-5	27蟹-2-15	河豚蟹	豊	(120)	-	(39)	ヨコズナヘカズリ	日本ナメ・ナメ	EE	貝	暗青色	暗青色	半部外側にへら足跡あり	
21-6	27蟹-2-39	河豚蟹	豊	9.9	-	6.7	ヨコズナヘカズリ	日本ナメ・ナメ	EE	貝	灰白色	灰白色	地色	
21-7	27蟹-16-20-26-31	河豚蟹	豊	(250)	-	(98)	ヨコズナヘカズリ	日本ナメ・ナメ	EE	貝	青灰色	青灰色	反転後足	
21-8	27蟹	土野蟹	豊	(84)	116	(72)	タカシ	厚壳のため不明	SD	貝	深灰色	深灰色	地色	
21-9	27蟹-2-42	土野蟹	豊	(116)	-	(41)	厚壳のため不明	ナメ	ヨコズナ	ABC	貝	深海性	深海性	
21-10	27蟹-2-11-12	土野蟹	豊	(202)	-	(65)	ヨコズナ	ナメ	ABC	貝	深海性	深海性	地色	
22-1	28蟹	河豚蟹	横	(5.4)	91	4.8	ヨコズナヘカズリ	ナメ	EE	貝	暗褐色	暗褐色		
22-2	28蟹	土野蟹	豊	-	-	9.9	ヨコズナヘカズリ	ナメ	EE	貝	灰白色	灰白色	地色	
22-3	28蟹	土野蟹	豊	(160)	-	(42)	厚壳のため不明	厚壳のため不明	BCD	貝	地色	地色	反転後足	
22-4	28蟹-3	土野蟹	豊	(122)	-	(55)	厚壳のため不明	厚壳のため不明	CD	貝	灰褐色	灰褐色	地色	
22-5	28蟹-マド-8	土野蟹	豊	(147)	15.7	16.6	ハメ	ヨコズナ	ABCD	貝	深海性	深海性		
22-6	29蟹	河豚蟹	豊	(116)	-	41	厚壳のため不明	ナメ	ヨコズナ	ABC	貝	深海性	深海性	
22-7	29蟹-20-21	土野蟹	豊	(200)	-	(165)	ナメ	ヨコズナ	ABC	貝	灰褐色	灰褐色	地色	
23-1	30蟹-5, 30蟹-(-3足)	土野蟹	豊	-	-	(125)	ナメ	ナメ	ABC	貝	灰褐色	灰褐色	地色	
23-2	30蟹-4	土野蟹	豊	-	-	13.0	12.8	ハメ	ヨコズナ	ABC	貝	深海性	深海性	
24-1	34蟹-1	河豚蟹	豊	(116)	-	94	30	ヨコズナ	厚壳のため不明	ABC	貝	深海性	深海性	
24-2	34蟹-1	土野蟹	豊	(122)	-	100	3.3	ヨコズナヘカズリ	厚壳のため不明	AB	貝	深海性	深海性	
24-3	36蟹	土野蟹	坪	12.2	-	32	厚壳のため不明	厚壳のため不明	SD	貝	深海性	深海性	地色	
24-4	36蟹	土野蟹	坪	14.2	-	39	ヨコズナヘカズリ	厚壳のため不明	S	貝	暗褐色	暗褐色	地色	
25-1	38蟹	河豚蟹	豊	(112)	-	36	ヨコズナヘカズリ	ナメ	EE	貝	青灰色	青灰色	半部外側にへら足跡あり	
25-2	38蟹-6	土野蟹	豊	(200)	-	(53)	ヨコズナ	ナメ	ABCE	貝	灰褐色	灰褐色	地色	
25-3	38蟹-2	土野蟹	豊	(27.1)	-	(26.8)	ハメ	ヨコズナ	ABCD	貝	深海性	深海性	地色	
26-1	39蟹-4	河豚蟹	坪	11.4	-	4.5	ヨコズナヘカズリ	日本ナメ・ナメ	EE	貝	青灰色	青灰色	地色	
26-2	39蟹-7	土野蟹	豊	-	-	(48)	ナメ	ヨコズナ	SD	貝	地色	地色	地色	
26-3	39蟹-1-カド子	土野蟹	豊	(27.0)	-	(176)	ナメ	ナメ	ABCE	貝	灰褐色	灰褐色	地色	
26-4	41蟹-14	河豚蟹	豊	13.4	-	41	ヨコズナヘカズリ	日本ナメ・ナメ	ABCE	貝	青灰色	青灰色		
26-5	41蟹-9	土野蟹	豊	(14.3)	-	(5.2)	ナメ	ヨコズナ	ABCE	貝	灰褐色	灰褐色	地色	
26-6	41蟹-14-41蟹	河豚蟹	豊	(106)	-	3.9	ヨコズナヘカズリ	日本ナメ・ナメ	EE	貝	青灰色	青灰色	地色	
26-7	49-41蟹	河豚蟹	豊	12.8	-	10.8	ヨコズナヘカズリ	日本ナメ・ナメ	EE	貝	青灰色	青灰色	地色	
26-8	49-41蟹	河豚蟹	豊	-	-	(95)	ヨコズナ	日本ナメ・ナメ	EE	貝	地色	地色	地色	
27-1	42蟹-1-4	土野蟹	豊	(216)	-	(197)	ハメ	ヨコズナ	ABCD	貝	暗褐色	暗褐色	地色	
28-1	44蟹 (B-2 KZP 2)	土野蟹	豊	(13.2)	-	(89)	厚壳のため不明	ナメ	ヨコズナ	ABCD	貝	深海性	深海性	地色
28-2	45蟹-1	土野蟹	豊	-	-	8.0	ヨコズナ	厚壳のため不明	SD	貝	深海性	深海性	地色	
36-1	10-大	河豚蟹	豊	-	-	(1.8)	ナメ	ヨコズナ	ABCE	貝	青灰色	青灰色		
36-2	14-土	河豚蟹	豊	11.8	-	3.6	ヨコズナヘカズリ	日本ナメ・ナメ	ABCE	貝	深海性	深海性		
36-3	14-土-10	土野蟹	豊	-	-	(12.0)	ナメ	ヨコズナ	厚壳のため不明	ACCEH	貝	灰褐色	灰褐色	地色

胎土-A:角閃石-B:石英-C:長石-D:赤色粒子-E:白色粒子-F:黑色粒子-G:雲母-H:砂粒

第4表 鉄製品・鉄生産関連遺物観察表

掲番号	遺構名	器種	長さ	最大幅	最大厚	重さ	備考
37-1	41 罂-23	鉄鏃	16.7	(2.8)	0.3		
37-2	14 罂-1	鉄鏃	(10.8)	3.0	3.0		刃部先端部を欠く
37-3	38 罂-1	鉄鏃	(10.7)	2.1	0.2		
37-4	24 罂-2	細鏃	11.0	2.0	0.3		
37-5	24 罂-2	細鏃	9.7	2.8	0.2		
37-6	B-2 区 P3	刀子	(14.2)	2.0	0.5		先端部を欠く
37-7	47 罂	刀子?	(6.1)	(1.5)	0.4		
37-8	10 罂 (F-3・4 区)	鉄鏃	(3.4)	(0.7)	(0.3)		鉄鏃頭部
37-9	10 罂 (F-3・4 区)	鉄鏃	(4.5)	(0.5)	(0.5)		鉄鏃茎部
37-10	36 罂 (B-4 区)	鉄鏃	(4.2)	0.8	0.2		鉄鏃頭部
37-11	5 罂 (G・H-3・4 区)	鉄鏃	(2.6)	0.5	0.5		鉄鏃基部か
37-12	5 罂 (G・H-3・4 区)	鉄鏃	(7.7)	0.6	0.4		鉄鏃茎部か
37-13	16 罂	鉄滓	-	-	-	75	分析 (KBR3) 鐵治滓
37-14	17 罂-11	鉄滓	-	-	-	236	分析 (KBR2) 楕形鐵治滓 (含鉄)
37-15	17 罂-11	鉄滓	-	-	-		椭形滓
37-16	18 罂 (E-3 区)-11	鉄滓	-	-	-		椭形滓

第5表 石器・石製品観察表

図版番号	遺構名	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
37-17	6 罂-1	勾玉	2.20	1.30	0.70	2.68	玉軸系 (メノウ)
37-18	38 罂-1	結睡車	3.90	4.10	1.40	36.2	滑石
37-19	39・40・41 罂	結睡車	4.10	4.35	1.60	56.1	滑石
37-20	7 建 (E-2 区 P3)	結睡車	(3.65)	(1.65)	(1.60)	(17.6)	滑石 1/2 残存
37-21	14 罂	不明	(4.30)	(5.20)	(1.75)	(35.7)	滑石 破片 バレン状のつまみあり
37-22	17 罂	不明	(6.70)	(6.75)	(2.30)	(84.9)	滑石 蔊孔あり 外面にス付着 石綿の破片か
37-23	39・40・41 罂	砾石	4.20	2.28	1.65	27.0	6面使用
37-24	18 土	砾石	5.50	4.10	3.50	79.6	3面使用
37-25	27 罂-2	砾石	9.70	4.05	1.90	67.8	3面使用
37-26	27 罂-2・5	砾石	8.60	4.10	5.30	148.1	4面使用
37-27	3 罂	砾石	6.15	3.60	1.90	51.4	5面使用
37-28	24 罂-6	砾石	6.60	3.50	2.25	47.5	5面使用
38-1	6 罂 (H-5 区)	石器	(2.25)	(1.40)	0.40	(0.85)	黒曜石 片方の脚部欠損
38-2	10 罂 (F-3・4 区)	楔形石器	2.35	1.65	0.80	2.69	黒曜石
38-3	3 罂 (I-4 区)	使用痕剥片	3.50	1.95	0.80	5.97	黒曜石
38-4	14 罂 (E-4 区)	打製石斧	(5.10)	(5.05)	0.70	(20.9)	
38-5	17 罂 P (A-3)	打製石斧	(7.10)	(6.15)	0.85	(35.5)	安山岩
38-6	5 罂-5	打製石斧	(8.25)	(6.10)	(2.40)	(91.4)	安山岩
38-7	8 罂 (G-3 区)	打製石斧	(6.50)	(6.35)	2.00	(102.2)	安山岩
38-8	含金層	打製石斧	(9.20)	(3.70)	(1.00)	(54.0)	
38-9	D-3 区 P2	打製石斧	(7.00)	(9.40)	(1.60)	(109.3)	安山岩
38-10	D-5 区表探	打製石斧	(15.30)	(8.05)	(3.15)	(469.6)	安山岩
38-11	P-5 区 P3	打製石斧	13.15	6.65	1.75	153.4	安山岩
38-12	25 罂	磨製石斧	(13.00)	(5.95)	(3.35)	(373.2)	未製品か
38-13	31 罂-1	磨製石斧	9.35	4.90	2.25	160.4	
38-14	19 罂	磨製石斧	5.85	1.95	1.05	21.2	石擊か

単位: cm. () は現存残



長迫遺跡全景（南から）

写真図版 2



1号堅穴建物跡（西から）



1号堅穴建物跡カマド



2号堅穴建物跡（西から）



2号堅穴建物跡カマド



3号堅穴建物跡（西から）



3号堅穴建物跡カマド



3号堅穴建物跡、8号土坑（西から）



4号堅穴建物跡、8号土坑（西から）



5号竪穴建物跡（南から）



5号竪穴建物跡カマド



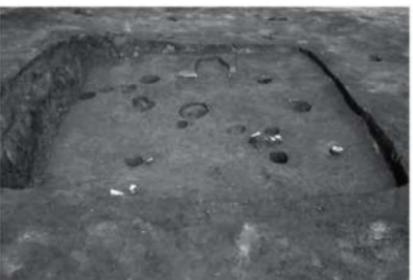
6号竪穴建物跡（西から）



6号竪穴建物跡カマド



6号竪穴建物跡 勾玉出土状況



7号竪穴建物跡（南から）



7号竪穴建物跡カマド



8号竪穴建物跡（南から）

写真図版 4



9号竪穴建物跡（南から）



9号竪穴建物跡カマド



10号竪穴建物跡（南東から）



10号竪穴建物跡カマド



11・12号竪穴建物跡（西から）



11号竪穴建物跡 遺物出土状況



13号竪穴建物跡（南から）



13号竪穴建物跡カマド



14号竪穴建物跡（西から）



14号竪穴建物跡カマド



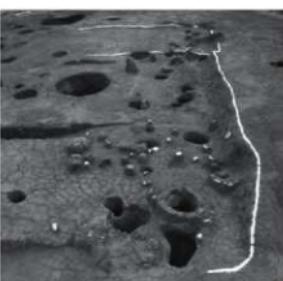
14号竪穴建物跡 鉄製品出土状況



15～17号竪穴建物跡、19号土坑（西から）



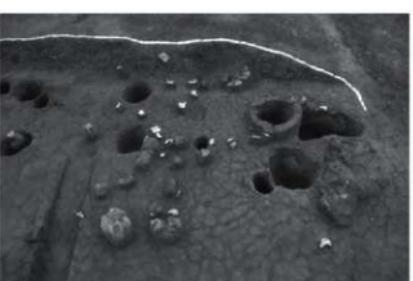
15号竪穴建物跡（東から）



16・17号竪穴建物跡（南から）

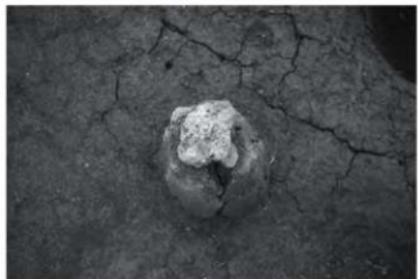


17号竪穴建物跡（西から）



17号竪穴建物跡カマド

写真図版 6



17号竪穴建物跡 鉄滓出土状況



17号竪穴建物跡 白磁小皿出土状況



17号竪穴建物跡 四耳壺出土状況



18号竪穴建物跡（東から）



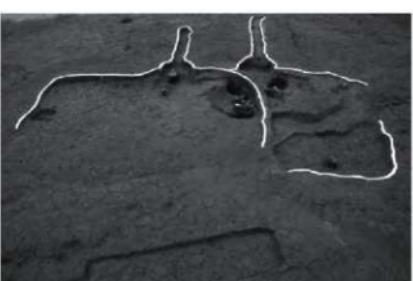
18号竪穴建物跡カマド



19号竪穴建物跡（南から）



19号竪穴建物跡カマド



20・21号竪穴建物跡（西から）



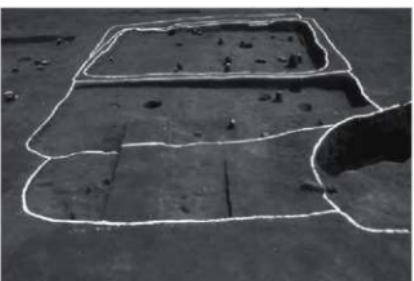
20号竪穴建物跡（西から）



20号竪穴建物跡カマド



21号竪穴建物跡カマド



22-1～3、23号竪穴建物跡、15号土坑（西から）



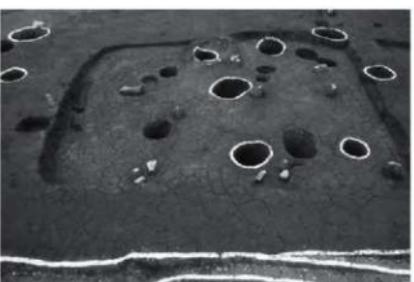
22-1～3号竪穴建物跡（西から）



22-1号竪穴建物跡カマド



22-3号竪穴建物跡カマド



24号竪穴建物跡、3号掘立柱建物跡（南から）

写真図版 8



24号整穴建物跡（南から）



24号整穴建物跡カマド



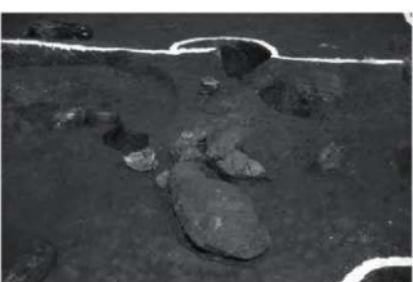
24号整穴建物跡 鉄製品出土状況



25号整穴建物跡、2号掘立柱建物跡（北東から）



25号整穴建物跡、2号掘立柱建物（南から）



25号整穴建物跡カマド



26号整穴建物跡（東から）



27号整穴建物跡、5・17号土坑（東から）



27号竖穴建物跡、5・17号土坑（北から）



28号竖穴建物跡（南から）



28号竖穴建物跡カマド



29号竖穴建物跡（南から）



29号竖穴建物跡カマド



30・31号竖穴建物跡（西から）



30号竖穴建物跡カマド



32～38号竖穴建物跡（西から）

写真図版 10



32・33号竪穴建物跡（西から）



32号竪穴建物跡カマド



33号竪穴建物跡カマド



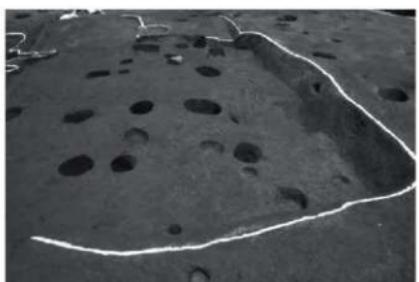
34～37号竪穴建物跡（西から）



36号竪穴建物跡（西から）



34・35・37・38号竪穴建物跡（西から）



38号竪穴建物跡（下層）（南から）



38号竪穴建物跡（下層）遺物出土状況



38号竪穴建物跡（下層） 鉄製品出土状況



39～41号竪穴建物跡（北から）



42・43号竪穴建物跡（西から）



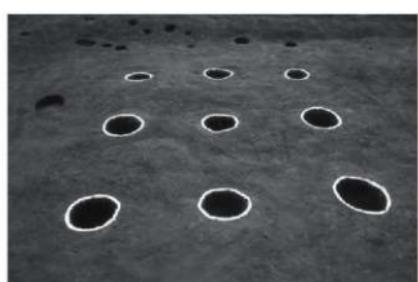
42号竪穴建物跡カマド



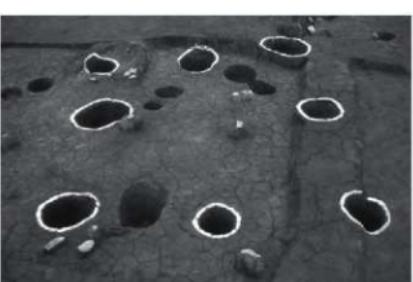
43号竪穴建物跡カマド



45～47号竪穴建物跡（西から）



1号据立柱建物跡（北東から）

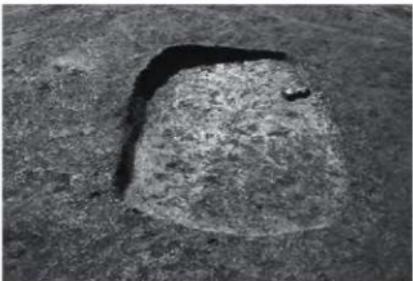


3号据立柱建物跡（南から）

写真図版 12



4・5号掘立柱建物跡（西から）



1号土坑から（北から）



2号土坑（北から）



5・17号土坑（東から）



6号土坑（西から）



7号土坑（東から）



10号土坑（南から）



11号土坑（西から）



6-1



7-1



9-1



7-4



9-4



9-6



9-7



9-9



10-1



10-3



10-4



10-5



11-1



11-2

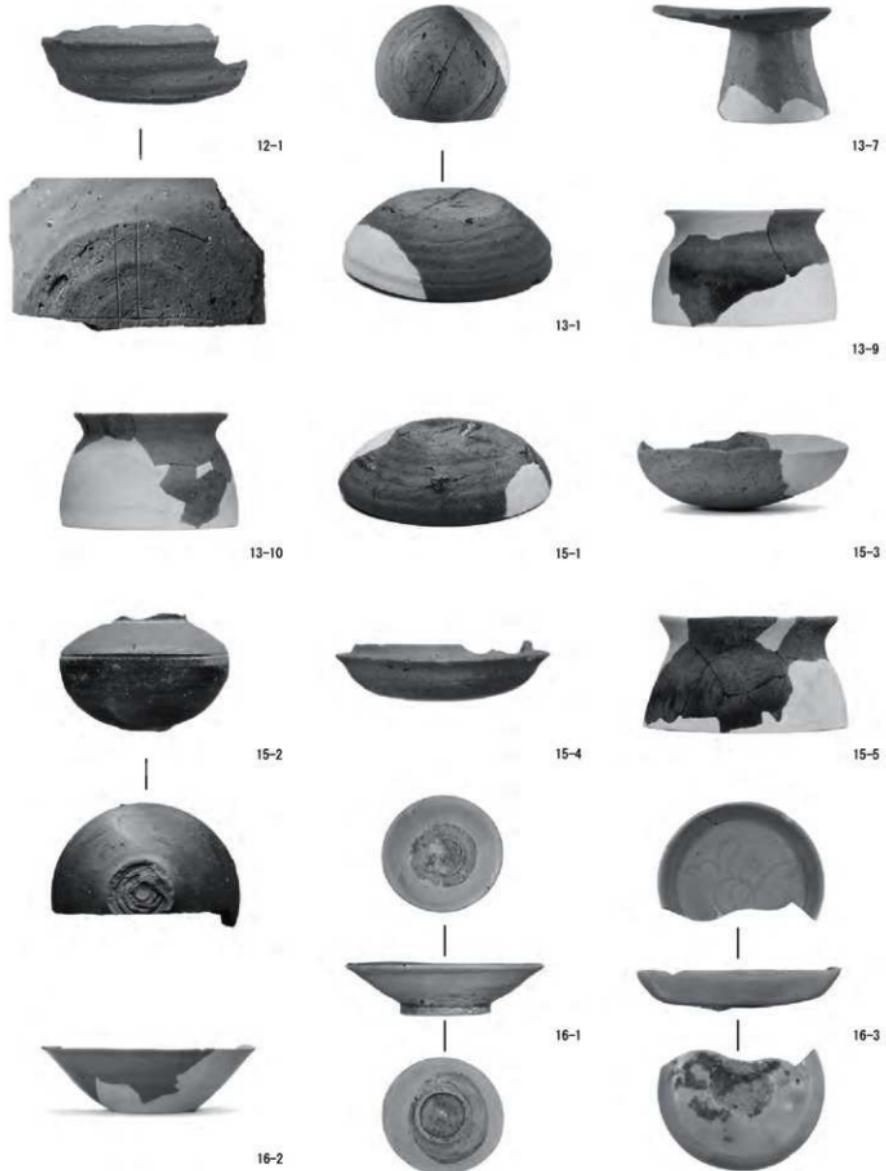


11-5



11-7

写真図版 14





17-4



18-1



18-2



19-1



19-2



20-3



20-4



20-6



20-7



21-1

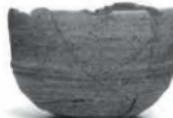


21-4



|

21-5



|

21-6



21-7



写真図版 16



21-8



21-9



22-1



22-2



22-5



22-6



23-2



24-2



24-3



24-4



25-3

|



26-1



26-2



26-3



26-4



26-5



37-1

37-4

37-13



37-2

37-6

37-14



37-3

37-15

37-16



37-17



37-18



37-19



37-20



37-21



37-22



37-23



37-24



37-25



37-26



37-27



37-28



38-1



38-2



38-3



38-5



38-6



38-7



38-8



38-9



38-10



38-11



38-12



38-13



38-14

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ながさこいせきえーちでん
書名	長迫遺跡A地点
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書／ウッドコンビナート建設推進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第109集／8
編著者名	行時 桂子
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町 516-1 0973(24)7171
発行年月日	2013年3月29日

所収遺跡名	所轄名 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	通路番号					
ながきこ 長追遺跡 (A 地点)	おおいたけん 大分市 大分県日田市 由布市さつま町 大字有田	44204	204223	33° 19' 37"	130° 58' 1"	19961216 ～ 19970724	6,650 m ²	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長迫遺跡 (A地点)	集落	古墳～古代	竪穴建物跡47軒、 掘立柱建物跡7棟、 井戸2基、土坑20基、 溝3条	土師器、須恵器、白磁、青磁、 石製品(紡錘車、勾玉)、石器(剥片、 打製石斧、磨製石斧、砥石)、 鍛冶品(斧頭、刀子、鎌、鉗錐)、 鐵滓	古墳時代後期・平安時代の 竪穴建物跡より鐵滓が出土 している。

長追跡は日田盆地東部の阿蘇溶岩台地上、求来里川によって生成された冲積地から東丘陵に向かって入り込む二股に分岐した谷一帯に位置し、今回報告する A 地点はそのうちの南側の谷をさす。調査では豊穴建物跡 47 軒、掘立柱建物跡 7 棟、井戸 2 基、土坑 20 基、溝 3 条が確認され、出土遺物から大まかに古墳時代後期～平安時代の集落跡と考えられる。

遺構配置の状況からは、特に古墳時代後期について、一辺約 150 m ほどの大型豊穴建物跡の周間に規模の小さな豊穴建物跡が見られ、この時期の集落内の建物配置を考える上で興味深く、さらには、谷奥の高い部分には多数の小ピットのみで居住に関する遺構が全く存在しないことから、居住地ではなく畑作など生産地として土地の使い分けが行われていた可能性が考えられる。

また、古墳時代後期および平安時代の一部の豊穴建物跡からは鉄滓が出土しており、鉄生産との関連もうかがえる。

長迫遺跡 A 地点

日田市埋蔵文化財調査報告書 第 109 集

2013 年 3 月 29 日

編 集 日田市教育庁文化財保護課
〒 877-0077 大分県日田市南友田町 516-1

発 行 日田市教育委員会
〒 877-8601 大分県日田市田島 2-6-1

印 刷 山本印刷有限会社
〒 877-0059 大分県日田市大日町 3986-3



日 田 市